

●オトナ純愛・オトナファンタジー合同企画

# ZATTA

10人の作家が魅せる個性  
シヨートシヨートアンソロジー

●Illust/FUMITOSHI

※この作品は横書きでレイアウトされています。

※この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件とは一切関係ありません。

## 目次

コラム:純愛と肉欲の境界線上で

静かにしみこむ…愛を感じるショートショート

すれ違い (小野大介)

睡蓮 (まりの)

眩暈 (GALA)

コラム:大人にこそファンタジーを

ライトから本格派まで! ファンタジーショートショート

藤森メグミは今日もやっぱり眠れない (柴田花蓮)

神の元で愛を叫ぶ (紅月実)

ある王様的一天 (鋼雅 暁)

使い魔の休息 (なぎのき)

コラム:短編というジャンル

短編だからこそそのうまみあふれる! パラエティショートショート

K氏の独白 (七ツ枝葉)

二人かくれんぼ (フィーカス)

饗食 (アザと一)

## コラム 純愛と肉欲の境界線上で

オトナ純愛……大人でありながら純愛というこの語感に引っかかりを感じたりはしないだろうか。特にオトナ純愛は主人公の年齢設定をアラサー世代に絞っている。愛情の行き着く果てが肉体の交わりであるとは知っていておかしくない年頃だ。

わたしはすでにアラサーを超えた世代であるからこそ、性臭がにおい立つようなドロドロとした愛の交わり方も知っている。獣のごとき本能のままに肌をむさぼりあうことができるのは、それが全てを許すほどに信頼をよせた相手だからこそその行為であることを心得ている。

だが、大人の愛というのは本当にそこにはばかり存在するものだろうか。

例えば蜜事の済んだベッドの中で、ただ静かに肌を寄せ合って眠る余韻の方が女には大切だったりする。例えば町を歩くとき、ただ静かにつかない手が泣きそうなほどに切ないことを女であれば知っている。

オトナ純愛が初動の作家陣に女性を多く起用したのはこれが理由だ。

純愛から肉欲を経て、また純愛へ帰結してゆく女心の美しさをまざまざと描き出すには、女性の筆がどうしても必要だったからだ。

これを起点として続々と刊行されるオトナ純愛は、そんな企画主の意図をも超えて実にバラエティにとんだ愛の物語が展開されている。

しかしその根底にあるのは大人だからこそ知る純愛、愛欲を交わした果てに帰結するいちばん美しい愛の形である、これだけは変わってはいないのだと企画主は言う。

愛とは実に様々な形で存在するものだ。だからこそこのオトナ純愛シリーズをあなたのコレクションに加えてはいかがだろうか。

きっとお気に入りの純愛のカタチが見つかることだろう。

### オトナ純愛既刊

好きだから別れます(栗生慧)

タマさん、拾いました。(まりの)

恋味コロッケ(アザトー)

馬酔木と満天星(KEY)

恋御籠(鋼雅 暁)

待ちあい(七ツ枝葉)

一度だけの純愛(栗生慧)

女妻(GALA)

Reve amer ～一粒の昔い夢～(紅月実)

それは一枚の年賀状(なぎのき)



耳障りに思えた蝉の鳴き声や、うだるような暑さがちょっぴり懐かしくなってきた昨今、いかがお過ごしでしょうか。

すっかり涼しくなりまして、日課の散歩も面倒に思えなくなり、容赦なく肌を焼く太陽への憎しみもどこかへ行ってしまいました。これで鬱陶しい天敵の蚊さえいなければ、本当に暮らしやすい季節なのですが。

さて、私は近頃、人間観察を始めまして、大事なお勤めのかたわら、退屈しのぎも兼ね、門前の道を行き交う人々の姿をこっそりと眺めております。これが案外面白いので、いっそ趣味にして本格的に楽しんでみようかと思っているのですが、そんな矢先のことでした、ある問題に直面してしまいました。

“悩み”と言い換えてもいいでしょう。

事の始まりは、夏休みが明けてしばらくのことでした。

朝、お父上様、お嬢様、お坊ちゃまの順に慌ただしくご出勤なさいまして、お一人残られたお母上様が、私の朝食をご用意くださるまでのひとときの間、門前の道を二人の男女がすれちがったのです。

男性のほうはお坊ちゃまと同じ高校に通われていると思われまふ。昔ながらの黒い学生服、いわゆる学ランを着られていましたので、まず間違いありません。

一方の女性ですが、これまた奇遇にもお嬢様と同じ制服を着られていまして、ですから女子高生でございませう。ちなみに私学で、制服はブレザーでございませう。ネイビーのジャケットにグレーのスカート、胸元には赤いリボンです。

二つの学校は別々の方向にありまして、お坊ちゃまは門を出られると右手に、お嬢様は左手に曲がられます。そして件のお二人も、月曜から土曜日までの毎朝、門前の道を通られます。通り道なのでしょうね。それは夏休みの前からずっとそうで、明けた今も変わることはありません。ただ、いつしか通勤のお時間が同じになり、そのときのように門前でちょうどすれちがうようになっていました。

おやおや、お二人さん、今日もお早いご出勤でございませうね。うちのお坊ちゃまと違って規則正しいこと。ご立派、ご立派。

そのとき私は、重ねた腕を枕にして横になり、大切なお勤めを怠けながら、今朝もまたすれちがうとは本当に規則正しいお二人だと、あくび交じりに感心していたのですが、お二人がすれちがった際に見せたある動きに気づいて、ハッとしました。息を飲みました。そして思わず立ち上がってしまいました。

同時ではなく、わずかな時間差はありましたが、お二人とも少し振り返り、すれちがった相手を目で追ったのです。どちらもすぐに前を向きましたので、多分にお気づきではないでしょう。ですが、私は気づいてしまいました。この自慢のつぶらな瞳を誤魔化すことはできません。

これはなにかあると気づいた私は、その日から毎朝、お二人の一举一動に注目しました。するとなんと、お二人はまるで示し合わせたように、ほぼ同時刻に門前の道を通られているではありませんか。しかしいつもただすれちがっては、相手の後ろ姿を目で追うばかりです。

傍観者に過ぎない私ですが、毎朝すれちがっては相手のことを気にかけるお二人の姿を見続けていますと、なんとも言えない気持ちになってしまい、食事も手がつかなくなりました。いつもならお代わりをせがむところなのに、最初に出された分だけで満足してしまいます。

この妙な気持ち、どう表現したものでしょう。胸の辺りがこう、もやもや、ざわざわとするのです。でも、もやもやもざわざわも、表現として正しくないというか、なにかがちょっと違う気がします。もっとこう、これだと思える言葉があるような気がしてならないのです。

例えるならば、そう、三丁目にお住いのサクラさんのことを思い浮かべると、似た気持ち

になりますね。二つ隣のユキちゃんや、近所の豪邸にお住いのリリオ嬢様、商店街を根城にされているアン姉さんのことを思い出しても、そんな気持ちになります。

そのことから察するに、これはきっと“恋心”の類ではないでしょうか。

恋心……それは、お坊ちゃまと共謀してつまみ食いをしたジャムのように甘酸っぱく、それでいてお嬢様が渡せずじまいだったチョコレートのようなほろ苦さがあるものでしょうか。なんて、実際はお砂糖が少なすぎて苦いばかりで、一舐めするのが精一杯でしたが。ピターにもほどがありますな。あれは渡さなくて正解だ。

あとは、そうですね、チーズが持つ不思議な魅力でしょうか。お父上様の映酌のお供をしたときに頂戴したのですが、なんででしょうね、あのかぐわしいまでの香りと濃厚なまでの旨味。あのかぐわしい味を思い浮かべると無性に食べたくなり、もやもやしてざわざわして、居ても立っても居られなくなります。

そうだ、そうです、あのなんとも言えない気持ちの正体こそが恋心なんです。きっとそうに違いない。

おっと、話が横道に逸れてしまいましたね。申し訳ない。つつい話が長くなってしまうのが私の悪い癖です。

とにかく、恋心に疎い私ですが、それでも、お二人の行動を見た瞬間に気づいたわけです。二人は恋をしているのだと。

毎朝、おはようの一言も交わせずすれちがう、それだけの密やかな関係なのだ。

雨の日には傘の下からそっと相手のことをうかがう。

すれちがいがまに声をかけようとして立ち止まるも勇気が出ず、タイミングも合わなくて、また前を向いて歩き出してしまふ。

そんなプラトニックラブの行く末を、私はこっそりと見守っていたわけです。

しかし、ある朝のことでした。お父上様たちをお見送りし、お母上様がいらっしゃるのを待ち焦がれつつ、私はいつものように門の外を眺めていたのですが、お二人は現れませんでした。

どうしたのだろうと小首をかしげて待っていると、ようやくお二人が通られたのですが、やってきたのは別々の時間で、いつものようにすれちがうことはなかったのです。

ええ、もちろん戸惑いましたとも、困惑しましたとも。これはどうしたことかと、まさかまさか、お二人の恋の炎は燃え尽きてしまったのかと愕然とし、人魚姫の如く水泡に帰してしまつたのかと喟然とし、希望という名の芽は虹色の花を咲かせずに枯れてしまつたのかと茫然となつてしまいました。

さすがの私も、そのときの衝撃には耐えられず、その日ばかりは日課の散歩も満足に楽しめず、食事も喉を通りませんでした。

ですが大丈夫、翌日には気持ちも切り替わり、昨日の分までしっかりと平らげました。いつもなら食べ飽きているゴハンも、一食抜いただけで美味しいと感じるので、不思議なものですね。

で、それから数日後の朝のことです。

私はすっかりお二人のことを忘れて、朝食後の満腹感と余韻に浸っておりました。行儀悪くも仰向けになって、清々しいまでの青空を眺めていたのです。

するとそのときでした、門前の道を通る人影がありました。無論、大事なお勤めを忘れていない私は、顔だけでも向けて注目したわけですが、それはなんと件のお二人でした。

私はすぐに飛び起きました。ええ、それはもう、そのまま空へと飛び上がってしまうのではないかと、というほどの勢いで。それぐらいの驚きと衝撃でございました。だって、お二人はそっと寄り添って歩いていたのですよ、手まで繋いで。

気恥ずかしいのでしょうか、照れくさいのでしょうか、お二人とも頬や耳を紅潮させておりました。

おやおや、お二人さん、今日はすれちがわないのですね。これからデートですか？

私は嬉しくなり、つついそんな野暮なことを聞いてしまいました。するとお二人は、な

んとも愛らしい笑顔をこちらに向けて、小さく手を振ってくれました。

幸せの見本のようなそのお姿はすぐに見えなくなって、私はまたごろりと横になりました。そして、より一層青く美しく見える天空を仰ぎました。

いやはや、なんて良い天気なのだろう。こんな素晴らしい日には、ぜひとも散歩に出かけたいものだ。ねえ、どなたか連れ出してはもらえませんか？

なんて問いかけをしてみました。残念ながら、私の声は誰にも届きません。

何故なら、その日は日曜日でした。ご家族の皆様は、せっかくの休日だからと朝も早くに出かけてしまわれたのです。

私はまた、ひとり置いてけぼりでございますか。今日も今日とてお留守番でございますか。件のお二人はもうすれちがわないというのに、私の想いは日々すれちがうばかりでございますなあ。

大人げ無くも拗ねた私は、そんな不満をこぼしつつも、ご家族の皆様が無事に帰られることを祈っておりました。お土産にチーズを買ってきてはくれないかと、ささやかな願いもついでに抱いて。

さて、前置きの近況報告はここまでにして、いい加減本題に入りましょう。

いま私が抱える悩みですが、よりたくさんチーズを食べるにはどうすればよいのでしょうか？ 満足するまであの味を堪能したいのです。お父上様にもっと恵んでもらいたいです。

件のお二人をきっかけに、恋心について考えさせられてからというもの、チーズへの愛が、想いが、日増しに強まってしょうがないのです。

ああ、恋しい。チーズが恋しい！

ご近所にお住いの皆様、私のこの切実な悩みを解決できる良案がもしもございましたら、お散歩の際にでも一吠えおかけいただけませんか。

どうかどうか、宜しく願い申し上げます。

一丁目のしがなひ番犬より。

(小説 『すれちがい』 原稿 著者・小野 大介 完)



## 睡蓮

まりの

ベッドで眠っている彼を起こさないよう、そっとウッドデッキに出てみる。  
山間の美しい池の畔のこの別荘をもらってもう何十年。  
昨夜の情事で気だるい体に、朝の空気が心地いい。  
風いだ緑青色を艶やかな丸い葉が彩る水面。  
日が高くなる時間、池の睡蓮が可憐な花を開く。  
ボン、ボンと音をたてて開く花。  
赤、ピンク、黄色、白。とりどりの花。  
足音が聞こえる。彼が目を覚ましたのね。でも私は振り返らず水面を見つめ続ける。  
「横にいなくなったから心配したよ」  
後ろから優しく彼に抱きしめられた。  
「どうして君はそんなにいつまでも綺麗なの？」  
何人の男が私にこうして囁いた？ 抱きしめた？  
それぞれに純粋に愛を語り、甘美な時を過ごして。  
それぞれに私はいつも本当に心の底から愛してきた。  
そして皆が私を残し去って行った。  
老いる事の無いこの身。時間から取り残された魔女。  
町の風景が変わり、人の服装も変わり……それでも私だけが変わらない。  
ある者は老い、ある者は病に倒れ、ある者は戦争に行き……それでも皆最後の時まで愛を囁いてくれた。だから余計に別れの時は悲しい。  
いつしか私は死に行く男達を見送るのが辛くなった。  
だからもう誰も愛さない、そう決めていたのに。  
それでもいつも誰かが私に愛を囁くの。  
私の心を持って行ってしまう。この人もそう。  
共にありたい、傍にいたい。愛しいが故に辛くて。  
「あなたは私の事を愛してる？」  
「ああ、勿論だよ。他の誰もいない。君だけを愛してる」  
このやりとりも何回目だろうか。  
「愛しているなら私を殺して」  
「そんな事できる訳ないじゃないか！」  
今、私が唯一欲しいのは死ぬ事。  
死は憧れを超えて、縋り付きたいもの。  
清浄 甘美 純粋な心 信仰。  
目の前の池に浮かぶ睡蓮の花言葉。  
私には似つかわしくはないけれど、誠実なあなたには似合う。  
ああ、そろそろまた時が来てしまったようね。

少し高くなった日に、池の睡蓮が弾ける音をたてる。  
ボン、ボン。  
シャン／＼の栓を抜くのに少しだけ似てる。  
ボン、ボン。  
「あなたは何色の花が好き？」  
「白かな」  
もらった指輪を薬指から抜いて、池に放り込む。  
「どうして……？」  
私を殺してくれないなら、もうあなたに用は無い。

「この池の睡蓮をよく見てみて」

ピンクの花の花芯にはルビーのピアス。

赤い花の花芯には金色の指輪。

池の冷たい水の奥に沈む愛した、愛してくれた男達一人一人の思い出。

毎年こうやって私に見せに来るの。

今の指輪は来年、白い花になって上がってくるかしら。

「さようなら……」

鈍い大きな水音を掻き消すように、睡蓮は咲き続ける。

老いることも、この美貌が損なわれることも無い。

でも自ら死ぬことは出来ない。

私が心から愛し、愛してくれる人にしかこの命は絶てない。

昔々に私が拒んだ一人の男が、私にかけた呪い。

もう少し待っていて。私も行くわね、皆のところ。

私は何色の花で咲くのかしら。

まだ私を愛してくれるなら、囲むように咲いてくれる？

睡蓮のもう一つの花言葉は……破滅。

私はそれを切望する。

眩暈(めまい)がするようになったのは去年の夏ごろだった。ただの貧血だと思っていたら、送られて来た定期健診の結果に「要再検査」の為の紹介状が入っていた。

ガンかもしれない？ 生理が重い、不正出血がある——思い当たる節はあったがただの筋腫かもしれない、と自分をごまかしながら、1週間後仕事を休みA大附属病院の産婦人科へ行った。

「ここに黒いのがあるの、わかります？ これがね、腫瘍です。これがあるので生理が重くて出血も多かった、そのせいで貧血や眩暈も起きていたと思います。一応細胞検査出しますけど恐らく悪性かと。まだそんなに大きくないので、ステージは悪くてもⅠ、Ⅱまではいってないだろうと思います」  
「……はあ」

MRIの写真が数枚印刷されたコピー用紙に赤いボールペンでグリグリと書き込まれ、あっさりした告知に気の抜けたような返事しかできなかった。

「細胞検査の結果を1週間後に聞きにきてください、その時手術の相談をしますからご家族も一緒に」

「ガンの手術」——その言葉は、あらゆる日常をぶった切る。

「ただいま」

高校生の次男・聖(さとる)が帰ってきた。

「おかえり。テスト、どうだった」

「最悪。死んだ」

言葉は悪いが、笑顔だからまあ少しは良かったのかもしれない。

「でもこの前先生に褒められたんだぜ、運動部の割には頑張ってる、って。夏引退したらめっちゃ勉強するし」

「はいはい。ほら、手洗って洗濯物と弁当箱出して！ ご飯ご飯」

「うー」

床に置いた大きなバッグから色々取り出し、のそり、と立ち上がる。中1からバスケットを始め180cmを超えたが、根は小学生の頃とあまり変わらないかわいい息子だ。

テーブルに夕飯を並べていると、夫が帰ってきた。

「ああ、お帰りなさい」

「どうだった、病院」

一応、気にはかけてくれていたようだ。共働きなのに家ではほとんど何もしない夫と、部活で帰りの遅い息子だけでは、入院中の生活も心配だ。だからといって東京の大学にいる長男に帰ってきてもらったとしても、食い扶持が増えるだけでたいして頼りにはならないだろう。

「やっぱり子宮ガンみたい。でも早期発見だから手術すれば大丈夫だって……ねえ、来週ちょっと午後からとかでも休み取れない？ 先生が手術の説明してくれるって」

「え？ ……別にいいけどなあ、お前がちゃんと聞いて俺に報告すればいい」

「そういうわけにはいかないでしょ、説明責任ってもんがあるのよ。大体あなたいつも『お前の話はよくわからん』って怒るじゃない、私だって嫌よ。報告すればいい、なんて上司みたいに言わないでよ！」

「……なんだ、今日はえらく強気だなあ」

「からかわないで。私だってショックなんだから」

「まあまあ、父さんもフツーに行けばいいじゃん。それ位のことしてやれよ」

「簡単に休み取れって言われてもな」

「簡単、って……私の命に関わる手術かもしれないのに？ もし何かあっても『聞いてない』で済むと思ってるのね、いつもみたいに」

「ストップ！ やめろって。父さん本当は怖いんだろ」

「はっ、馬鹿な。何が怖いっていうんだ、母さんだって大丈夫って自分で言ったじゃないか」

「つまんねえ意地はってねえで行ってやれ、って言ってんだよ。冷てえな」

「生意気言うな、男の仕事ってもんはなあ……」

「母さんあつての父さんの仕事だろ」

不覚にも泣きそうになった。まだまだ子供だと思っていたし、まだ反抗期だった時の名残りで生意気な事を言ったり、時には物にあたりたりして正直怖いこともあるが、根は優しい子なのだ。

「フン、いっばしの口ききおって……わかったよ、水曜日の午後ならなんとか」

「よろしくね」

立ったついでに聖(さとる)の頭をくしゃっと撫でたら、ヤメロ、と笑いながら払いのけられた。

\*

「——以上が奥様の病状と手術についての説明です。難しい手術ではありませんが、聞いてみないと何が出てくるかわからない部分もありますので時間はあくまでも目安です。卵巣に関しては今後のリスクもありますので、一緒に取ることをお勧めします」

医師の説明を聞いた夫は、ゴクリと喉を鳴らしたが食い下がった質問をすることはなかった。彼も「ぶった切られた」のかもしれない。

手術まで2週間。その間しなければならなかったことがあった。死なない為の手術ではあるが、何が起こるかわからない。

パソコンにUSBを2本差し込む——ずらっと並んだワードのアイコン。片方のUSBの文書をもう片方にすべて移動させ、元のUSBを空にした。移した方も、ひとつずつ文書名を確認し削除できるものはしておく。最後にパスワードを変更……これでいい、はず。

サイトにアップしているものは、USBから削除してもなんとかなる。気になるものは生還してからまた戻せばいい。これだけは、家族に見られてはならない。

夫にも息子達にも知られたくないもう一つの私の顔——BL小説家。

小説家なんて格好のいいものではない。アマチュアではあるけれども、8年ほど前から小説を書いては自サイトにアップし続けている。更新ごとに平均100名くらいのアクセスではあるが、私の小説を好きだと言って下さる方もいるし、何より仲間との交流が楽しい。

サイトの方は手術直前に一言添えればいとして、問題は集めた「本」だ。8年ともなれば胸に抱えられるサイズのダンボールいっぱいになる。それをガムテープで蓋をし、宅配便の伝票に同じ市内にいるBL仲間の住所氏名を書き込んだ。いつかふざけて「突然は死ねないよね」と話した時、「何かあったらお互い助け合おう」と約束したのだ。今回のことももちろん承諾済み。

これで、万が一何かあっても体裁を保てるはず。パソコン本体も、家族と別にしてあったアカウントを削除した。SNSのアカウントも、無難なもの以外すべて一旦退会した。これで見られてはならないものはなくなったはずだ。

手術前の日にダンボールを宅配便に出し、USBは一応クローゼットの一番奥にある衣装ケースのバッグの中に隠した。

\*

手術は、1時間ほど予定をオーバーしたがリンパへの転移も見られず、順調に終わった。ガンのリスクが高い卵巣も一緒に取ったので、これからしばらくはホルモンバランスが崩れ変調があるらしいけれど、命には代えられない。問題は、またかつてのようなBLの濡れ場を書く気になれるかどうか、だ。

ようやく意識がはっきりとした3日目の夕方、聖が一人でやってきた。家での生活を聞くと、意外にも夫が色々やってくれていて、今朝はお弁当も作ってくれたようだった。

「冷凍食品ばかりだったけどな、まあないよりまし」

「そうね、ちゃんとありがとう、って言いなさいよ」

「えー、なんか、それはなあ……オレだって洗い物したり洗濯干したりしてんのに」

「いいじゃない、減るもんじゃなし」

「はいはい。父さんもさ、毎日結構早く帰ってきて洗濯物取り込んで、畳んでるよ。この前なんか黒焦げの野菜炒め作ってたし、カットシャツ自分でアイロンかけてんだぜ」

「へえ、やるじゃない。私がいると何にもしないのにな」

「母さん帰ってからも自分でやってもらえば」

「あんたもね」

「うわ、しまった……墓穴」

思わず笑ってしまいお腹が痛む。笑わせないでよ、と言うと小さい頃と変わらないいたずらっ子の顔をした。

長男の寛(ひろし)から送ってきたメールを聖に見せると、オレにも来た、と携帯の画面を見せてくれた。

(帰れなくて悪い！ 聖、母さんを頼んだぞ オレの分までしっかり支えてやってくれ)

私には「その後どう？ 頑張れ」としか送って来なかったのに。ぶっきらぼうだけど本当は優しい子なのよね……急に会いたくてたまらなくなり視界が滲んだ。そしてそんな私を見て鼻をすすりあげる聖が前よりも愛おしい。

しかしそんなほんわりした空気をぶった切ったのも聖だった。

「あ、そうそう、母さんこれ、何？」

聖がポケットから取り出したのは……見慣れたUSB……！ あんな奥深くに隠したのに！

「あ、ああ……ずっと前に使ってたやつだけどどこにあったの、それ」

白々しくはないだろうか？ 内心は心臓バクバクだ。

「なんか父さんがさ、入院用の荷物つめるのにバッグ探してて。あの、緑の大き目のバッグの中にあったって。空なら欲しいと思って挿して見たけどロックかかってさあ……使ってないなら貰うからパスワード教えてよ」

冗談じゃない、それにはまだ書きかけのものが3本くらいは入っているのだ。冒頭から結濃厚な絡みもある。夫も余計なことしてくれたものだ。

「そんなの、買いなさいよ」

「ちえっ、なんだよ。少しでも節約してやろうと思ったのに。それ、親父がさあ、怪しんでたよ」

「へえ……別に何でも無いのに。多分、仕事だよ、パスワードも思い出せない。頂戴、それ」

聖の手から奪い取った。とほけるのがうまくなったのも年の功か。

「ふーん……ね、ところでさ」

ニヤニヤしながら、耳元に口を寄せた。

「ヒカル、って誰」

いやあああっ！ どうしてその名前を！？ 私の小説の中では一番力を入れていた長編の主人公の少年くん！ 心の中では顔面蒼白だ。

「まだ麻酔切れそうな時さあ、うなされるみたいに口走ってた」

うぐっ……

「あー……もういいよ、わかった、父さんには内緒にしといてやるよ。オレしか聞いてないから安心し

な」

「えっ、さあ、何のことか……名前、とか、じゃないんじゃない？」

「くっ、もういいって。訳アリ、ってことだろ。そんな動揺した母さん初めて見たわ、おもしれえ。もしかしてそのUSBもその人関係？」

「ち、違うってば！ もういいから、ほら、暗くなるから帰りなさいっ」

お腹に力が入らないのについ力んでしまい、変な声が出てしまった。

「うははっ、はいはい。わかりやすっ」

——ああ……弱みを握られてしまった、かなり誤解だけど。でも本当の事がいくるよりはマシか……軽い眩暈がして目を瞑り、深くため息をついた。

それよりも、入院患者と外科医のストーリーを考えてしまって早く文字に起したい病気は何科に行けばいいですか……？

—了—

## コラム 大人にこそファンタジーを

かつて、わたしはファンタジー世界の住人だった。わたしだけではない、子供であれば誰だって、ファンタジー世界に近いところにいるものだ。

幼子と遊ぶとき、こんなことはないだろうか。

草むらでしばらくしゃがんでいた子供がモミジのような掌に何かを握りこんで戻ってくる。開いた小さな手の上にいるのはダンゴムシかテントウムシか、大人なら取るに足らないような小虫の類である。

しかし幼子は、それがきもさも大事な存在であるかのようににっこりと笑うのだ。

「みてみて、虫『さん』」

万物に人格を与える彼らの前では、全ての命は等しい大きさと質量を持って存在している。まるで友人のように虫に触れ、感情が存在するかのように花に語りかける行為そのものがファンタジーである。

これを幼子が行うということにこそ意味がある。

彼らは小難しい理屈を考えない。ただ感性のままにこの世に隠されたファンタジーを見つけ出し、そこに柔らかな心を遊ばせ、自分だけの閉塞した美しい世界を描き出すのである。

ところがわたしたちは、大人になることによけいな理屈だの、常識だのといったちっけな枠組みを手に入れてしまう。感性は鈍り、世界を均質なものと捉える柔らかい感覚は失われてしまう。

幼子が人格を投影して語りかける存在も、わたしたちにとっては『小虫』であり、『植物』でしかない。それが人間の言葉を理解して、こちらに語りかけてくるなど決して起こりえない『ファンタジー』であるという線引きがなされてしまっているのだ。

だから、大人にこそ良質なファンタジーを。

文字の間に心を遊ばせるその瞬間くらいは、世界は均質であったころの、全ての命が等しく輝いていた子供の感覚をもう一度と……

大人ファンタジーはそういった願いをこめて企画されたものである。

対象読者は従来のファンタジーものよりも高年齢を狙うべく、主人公はアラサーであるという執筆上の約束が設けられている。それによって大人世代が読んでも共感度の高い物語が構築されるよう、配慮されているのだ。

さらに執筆陣を厳選し、ネット小説の世界で大人向けの文章を書く実力をそなえた数人に企画主がじかに声かけをするという形で初動メンバーをそろえた。

これにより大人が大人に向けて語る良質なファンタジー作品を確保することに成功したのである。

ぜひ一度これを手にとって、中身を確かめて……いや、楽しんでいただきたい。

常識や社会といった重たいよろいを脱ぎ捨てて、無邪気にただ楽しいだけだった幼いころの心の柔らかさをもう一度と、それが企画主の願いであるのだから。

### オトナファンタジー既刊

フィクションノート(フィーカス)

レディ・アンの純潔は今日もこえて守られる(柴田花蓮)

混虫社会(アザトー)

たんぽぽの騎士(小野大介)

俺はアーシェのハゲなのだ(小波奈子)

魔女の家(なぎのき)





## 藤森メグミは今日もやっぱり眠れない

交差点で起こった、車五台の玉突き事故。その事故現場傍の歩道で倒れていた私が目を覚ましたのは、実に事故発生から一か月後の事だった。

一台の車の前方不注意から始まった事故は、複数台の玉突き事故にも関わらず、運転手を含め命に関わる怪我をした人はいなかったのだそうだ。そんな状況下、私はというと、交差点で信号待ちしていたわけでも、車に乗っていたわけでもないのになぜ倒れていたのか。しかも目覚めないのか。目撃者もおらず、それは一か月の間謎とされていたようだ。

……ただ、皆には言えないけれど、私はちゃんと覚えている。確かあの時、道の石に躓いて転倒し、その弾みで道端のコンクリに頭をぶつけ地面に倒れた。そこにあの事故が偶然起こったのだ。そう、自分で転んで道に倒れて頭をぶつけただけなのだ。

言えない。実は無関係ですなんて、そんなこと言えるわけがない。

目覚めた私はとりあえず事故のショックで直前の記憶を失ったことにした。それゆえ身体には（当然ながら）他に異常はない為、私は数日リハビリをした後、自宅に戻れることになったのだ。

でもそんな私には、怪我云々ではなく一つ困ったことが起きていた。それは、何をしても「眠ることが出来ない」ということだ。

最初は、眠りすぎたせいかと思った。でも日が経って、やはりそれは異常だということに気が付いた。

医師に睡眠導入剤を処方されても、欠伸すら出ない。一応医師には「眠れるようになりまし」と言ったけれど、それ以降も変わらない。かといって顔にクマが出るわけでもなく、何だか私の中から「眠る」という行為が消えてしまったかのようだった。

眠っていた一か月間は、最初こそ「石に躓いて転んで倒れただけなのに最悪」と夢を見ていた。でもその内それも見なくなって、ただ眠り続けているだけ。

時間が経てば治るのだろうか。数日のリハビリ後、私は無事退院することが出来たけれど、結局一睡も出来ないまま、そんなことを考えていたのだった。

「メグミ、少し休んだら居間に降りてらっしゃい。お茶にしましょう」

「はい」

家族と共に一か月ぶりに自宅に戻った私は、久しぶりの自分の部屋に入り、大きく深呼吸をした。

ひんやりとした空気。でもどことなく居心地の良い雰囲気。落ち着いた匂い。

二十代も後半だというのに未だ実家に寄生している、もとい実家暮らしで堅実な生活をしている私にとっては、ここは唯一の城。年甲斐もなくピンクが好きだとか、リボンが好きだとか、そういうことは置いておいても、枕元においてある愛用の犬のぬいぐるみ「メロ」はこの城の番人であり私をいつも優しく出迎えてくれる存在だ。

「メロ、ただいま」

私はメロを抱きしめて、ベッドの上へとゴロンと寝転び天井を見上げた。

が。そんな私は、そこで奇妙なものを目にする。何故なら……ベッドの真上の天井。

そこに、熊のような象のような牛のような……なんとも言いがたい小型の「生物」が張り付いていたからだ。

\*

「……は？」

なにこれ、幻？ 私はメロを片手に思わず目をこする。

そこにいたのは、見たことが無い生物だった。

サイズは中型犬くらいだろうか。身体は、熊に似ている。でも顔……少し前に突き出した顔の先端についている鼻は、象みたいに長い。そしてだらんと揺れている尻尾は牛のそれに似ている。

……なにこれ。一か月間の留守中に何が！？

私は思わず「それ」を凝視する。

怖い。怖いんだけど……怖すぎて動くことが出来ない。私の目は「それ」に釘付けになっていた。すると……

『あのう』

目の前の「それ」が、なぜか私が理解できる言語で話しかけてきた。

『お話があるんです。あ、話づらいですか？ なら……』

「それ」はそう思ったかと思うと、次の瞬間姿を消した。

消えた！ 私は思わず目を見張ると、

『これなら大丈夫ですか？』

「メ……メロ！？」

何と手にしているぬいぐるみのメロが急に喋りだした。ただのぬいぐるみだったメロが喋りだすなんて……普通ならばあり得ない！

「ぎゃああ！」

私はメロをドアに向かって投げつけた。するとメロに宿った「それ」は空中で一回転すると床へと降り立った。なんて優雅！ いやそれよりも……！ 私が哑然としていると、

『とにかく話を聞いてもらえませんか。僕、貴女に謝らないといけません』

「それ」はそう言って私の直ぐ傍までトコトコと歩いてきた。そして立ち止まるなり、

『ごめんなさい！』

「え？ な、なにが……あ、ここに存在していることがですか？」

『違います。そうじゃなくて、眠りのこと』

「眠り？」

『はい。最近長い間眠っていませんでしたか？ そして、それ以降は何故か眠れない……』

「それ」の言葉に、私はハッとする。

どうしてそれを知っているんだろう？ 私が黙り込んでいると、「それ」は予想外の言葉をつづけた。

『実はそれ、僕のせいなんです』

「え？」

『お腹がすいていて、食べすぎちゃって』

「は？」

『僕、夢を食べて生きています』

「夢を……食べる？」

私は首をかしげる。

夢を食べるといって、確か……「バク」だけ？ 以前、何かのテレビか書物かで見聞きされていた時に得た情報をぼんやりと思い出しながら、私は目の前の生き物を見つめる。

「僕」……確か、中国かどこかの国で昔から言われている、悪夢を食べてくれるって言う想像上の動物だと言っていたような気がするけれど、その僕が私の夢を食べた？ しかも食べすぎちゃって、って何。そんな、スイーツ食べ過ぎちゃったみたいに告白されても、私が混乱していると、「それ」は続ける。

『僕、本来は悪夢を食べて生きています。でも、最近悪夢に出会えなくて』

「それと私と、何の関係が」

『本来食べるのは悪夢だけなんですけど、とにかくお腹がすいていて、とりあえず普通の夢でもいいやって……。気がついたら、潜在的な夢までも食べちゃって』

「はあ!？」

私は思わず叫ぶ。眠れないことについては、やっぱりちゃんと原因があったんだ! それはいいけれど、なにこの理由。私がそんなことを思っていると、

『大抵の人間は悪夢にうなされると眠れない。だからそれがなければ眠れる』

「じゃあ悪夢以外に普通の夢までなくなれば？」

『更にゆっくり眠れます』

「何が更によ! 要はあんたがあたしの夢を食べ過ぎたのが原因でしょ! だからその反動で私が眠れなくなったんでしょが!」

『そ、それは……でも、まさか石に躓いて転んだだけなのに あんなことになるなんて、悪夢以外何者でもないじゃないですか! 食べたら物凄く美味しかったです! だからこの人は他の夢も美味しいんじゃないかって!」

「逆切れか!」

『でもそれがばれてオトド様に怒られちゃって……罰として一か月間、貴女の為に働いてこいと命じられたのです』

「私の為に？」

私が胡散臭いものでもみるかのような目線を「それ」に向けると、

『僕の名前はバックン。そういうわけで、貴女のお手伝いをさせてください。損はさせませんから!』

「いや、得体の知れないものにそんなこと言われても。大体、私の何を手伝うのよ？」

『それは……そうですね、素敵な夜の過ごし方の提案とか』

「そんなのいらないわよ!」

『でも貴女の為に働かないと』

「それ」改めバックンはそういうと、首を傾げこちらを見ている。

ただ見た目は愛らしいことこの上ないけれど、中身が獾だと思つとぞっとする。

でも、その反面興味深いことも多い。

「ねえ、オトド様って？」

『オトド様は、僕らの世界の管理者です。人の悪夢の量というのは、実は皆同じ。それを一度に多く見るか、少量で長く見るかなんです。その量の調節をしているのがオトド様です』

「へえ」

『ただしオトド様は夢の量は調節できますが、その夢を見たことによって引き起こすことまでは管理していません。そこで、悪夢を見てしまった人に対し、それを食べて睡眠を確保してあげるのが、僕ら種族の役目なんです』

「ふーん」

『オトド様の話だと、僕が食べた量とあなたの睡眠量を調べたところ、それが一か月くらいの量だろうということでした。だから貴女もあと一か月くらいで元に戻ります』

「一か月……」

『ええ。なので僕はその間、貴女の為に働きながら、いつも通り悪夢に苦しんでいる人の夢も食べようと思っています』

バックンはそう言ってため息をついた。私はその姿を見つめつつ、少し考える。

……私が眠れなくなった原因はわかったし、バックンの事情も理解した。でも、一体どうしよう。結局は一か月眠れないわけだし、素敵な夜の過ごし方を教えてもらったところで、所詮バックンが考えるようなことだし。

私はあれこれと考えを巡らせたけれど、その内……ふと思ひ立った。

「ねえ。じゃあ……あなたの手伝いをさせてよ」

『僕の手伝い?』

「そう。バックンは悪夢を食べるんでしょう? 面白そうだから、その手伝いをさせて」

……別に手伝ってもらうことも思い当たらないし、それなら普段できないことをやってみよう。私はそう思ったのだ。

そうすることが私にとってある意味貴重な「社会経験」を積む手伝いになるならば問題ないでしょ？ 私が更にそう続けると、

『僕が悪夢を食べるのを見学することが、本当に社会経験になります？』

「なるなる。一か月は夜も眠なのよ」

眠ることが出来ればいいけれどそれもできないし……私がそう言うと、「わかりましたよ」とバックンはうな垂れた。そして、

『じゃあ早速今夜、行ってみますか。悪夢を見ている人を、僕らは察知できるんですよ』

「その場所まではどうやって行くの？」

『空を飛んでいくんです。僕の背中に跨れば大丈夫』

でもその為には元の姿に戻らないと。バックンはそう言うが早いか、メロから飛び出して本来の姿を私の目の前に曝け出す。

先ほど、天井に張り付いていた得体のしれない動物。さっきは怖かったけれど、今はそれなりに恐怖心も薄れている。

『えーと、何てお呼びすれば』

「私は藤森メグミ。メグミで構わないわ」

『わかりました。ではメグミ……よろしくお願いします』

「ええ」

私は満面の笑みでバックンの頭を撫でた。

……空を飛ぶってどんな感じだろう。夢を食べるって、どうやるんだろう。こんなことになったきっかけは問題だけれど、今日から不思議な一か月を過ごせることに変わりはないはずだ。

眠れないのは困るけれど、考えるだけでもワクワクする。私はそんなことを思いながら、これから始まる一か月間へと思いを馳せたのだった。

藤森メグミは今日もやっぱり眠れない。

(了)

※完全版、近日配信予定です

危険を孕んだ音が森に響く。金属のぶつかり合う音と荒い息遣いや、時折闇夜を切り裂く断末魔の悲鳴。洞窟前に散乱する複数のゴブリンの骸。その全てが戦闘行為の証明だった。ここで今二人の人間がゴブリン五匹と戦っているのだ。……と、見る間にゴブリンがまた一匹倒れた。

「ナルディアの御手に！」

魔物のために超略式の祈りを叫んだのは、金属製のバック・アンド・プレストを着けたいかにも戦士然とした風貌だ。ゴブリンを見事袈裟懸けにした無骨な彼は三十路半ば。一方その背後を守る女性はほっそりとしており、外見は二十歳になるかどうかといったところだ。暗がりでも整った顔立ちなのが見て取れる。二人は背中合わせで隙をカバーしつつ、一匹、また一匹と魔物を確実に仕留めていった。

両手持ちの大剣を振るルーベン・デーヴァと、小盾とフレイルを器用に使うセイラ・レイハンは神聖騎士団のトップである。四、五匹ならゴブリンごとに引けは取らない。

だが既に二回、火炎瓶を投げて小集団を屠っている。そろそろ敵もこの戦法に慣れてくるころだろう。何しろ、今回はただのゴブリン集団ではないようなのだ。

ゴブリンは暗黒神の眷属の中でも下っ端で、平均的な身長は一メートルちょっと。知能はあまり高くなく、集団で行動する性質と小柄ながら人間の成人男性よりも力が強いのが厄介だ。一般人では数匹を煙から追い払うのが精一杯。群れごと退治するなど不可能である。

作物を荒らされて困り果てたテレリ村の村長は、裏山に住み着いたゴブリンを退治して欲しいと教団に依頼した。そして神聖騎士団の母体組織、国教たるナルディア教団の命を受けて派遣されたのがルーベンとセイラだった。

村人に話を聞いて裏山を調べると、ゴブリンの潜伏場所はすぐに見付かった。丸一日を見張りに費やすと二十四程度の、雄ばかりの出稼ぎ部隊らしいと判明した。しかし、もし雌と子供がいたとしても情けは無用である。

魔物は人間の畑を荒らして家畜を盗む。そして食料にできるモノが無くなると、或いはもっと早い段階で人間を襲い……。いや、この先は言うまい。繁殖力の強いゴブリンはあつという間に増えるので、「ゴブリンを一匹見かけたら五十匹はいると思え」という格言もあるほどだ。情けをかけて雌と子供を逃がすと後々大事になる。

洞窟内にはいびきと臭いが充満しているはずだが、炎の壁が出入り口を塞いでいるので外には流れてこない。あの壁の向こうにはゴブリンがひしめいているだろう。そしてこの炎を踏み越えてくる魔物もいなかった。

手始めに洞窟の入り口で火を焚いて煙を中に送り込んだ。幻覚効果のあるキノコもくべて正常な判断力を失くすように仕向けた。そのキノコは凶暴性も増すので、外に出たところに人間がいれば間違いなく襲ってくる。これは近くの村に行かせないための対策でもある。

火酒と精製油の特性火炎瓶と一緒に、小さな固い木の実も一掴み炎の壁に投げ込んだ。熱せられると爆ぜて弾け飛ぶ木の実の性質を利用して、ゴブリンを炎の壁で分断することに成功した。

最後のゴブリンが倒れると同時に炎の壁が弱まった。火炎瓶の中身は一気に火が上がるよう調合してあるので、燃え尽きるのも急速だ。次の瓶を拾おうと手を伸ばしたルーベンは、悪寒を感じて吐きに跳びすさった。洞窟の中から飛んできた衝撃波で瓶が粉々になる。火酒の匂いがつんと鼻をついた。

衝撃波は次々とルーベンを襲い、同時にセイラも狙われている。ゴブリンは夜目が利くので夜の森など昼と大差ない。炎の壁は目くらましも兼ねていたのだ。舌打ちしたルーベンはセイラの方に行こうとするも、実弾を伴わない魔法の衝撃波に阻まれて足止めされる。

セイラの方もかろうじて死角へ避けたが、気付いたときには洞窟の左右に大きく離されていた。金属鎧なら直撃でも軽傷と腹を据えたルーベンだったが、時既に遅し。僅かな躊躇いの間に洞窟からゴブリンがわらわらと飛び出してきた。今度は己らが分断されたことにはぞを唾む。

テレリ村を荒らすゴブリンどもは、鳴子の罠を全て回避し場合によっては『解除』していた。せいぜいこっそり盗むのが関の山で、そんな知恵は普通のゴブリンは持ち合わせていない。その行動から知性の高いリーダーがいると思われた。

ゴブリンたちはお互いに十分な距離を取って、火炎瓶を避ける準備をしている。相雑ながら陣形らしい並び方を見たルーベンは、悪い予想が的中したのを悟った。そしてもう一つ新たな疑念が湧いた。知能が人間並みであればゴブリンでも呪式を操れるが、解毒魔法を残りのゴブリン全てに使い、衝撃波をあれだけ連発できる魔力は無いはず。そう思ったとき、油断なく構えるゴブリンたちの背後で気配が動いた。

洞窟の入り口から肩を決めるようにして一匹の……、いや一体のゴブリンが現れた。「現実には物語より奇なりけり」という格言がルーベンの脳裏をよぎる。堂々とした態度と大柄な体格、ゴブリンより人間に近い容姿。身長はセイラよりもあり、太い腕や逞しい胸はルーベンと張り合える。どこかから奪ったのだろう金属製のメイスと革製の鎧で武装するのは、ゴブリンの上位種ホブゴブリンだった。

ホブゴブリンは魔法型のゴブリンよりもずっと強い暗黒神の加護を受けている。優れた肉体的な能力に加えて、闇魔法を使う個体もいる。

ホブゴブリンの陰から小さい影がひょこりと顔を出した。装飾を施した杖と何かの頭骨を仮面のように被ったゴブリンメイジは、卑屈な態度でホブゴブリンの横に控えている。ルーベンは暗黒神ラザゼルの嘲笑を聞いたような気がした。

「アヴァ、ナーグ！」

ボスの命令で十数匹のゴブリンとメイジが一斉にセイラに向かう。セイラは即座に身を翻して逃走した。ホブゴブリンが威嚇の姿勢でルーベンを見る。その目にある悪意と知性の閃きがルーベンの怒りに火を点けた。

「うおおおおおっ！！」

大剣を振り被って打ち下ろす。ホブゴブリンは両手持ちの大メイスを水平にして受けた。ホブゴブリンの腕力は人間以上だ。厳しい訓練と幾多の実戦を経たルーベンならば総合的に互角といったところか。

一刻も早くセイラの援護に行かねばならない。額に青筋が浮かびルーベンの全身の筋肉がぎしんだ。ホブゴブリンが強引にルーベンを突き放した。剛力に内心舌を巻きながらもルーベンは逆らわず、自ら後ろにジャンプした。着地と同時に大剣をふんと薙ぎ払う！

剣風に神の奇跡——法力を乗せて風の刃を打ち出した。先ほどの衝撃波と似ているが、あれは暗黒神が魔力の源で短音の詠唱が必要だ。風属性と相性が良いルーベンは詠唱無しでも発動可能だった。少々威力は落ちるものの、斬戟と併用すれば硬いウロコを持つ魔物でも一刀の元に両断できた。

ぎいんと耳障りな音が生じて、ホブゴブリンがかざしたメイスに風の刃がぶち当たる。あらぬ方へ反らされた神気の刃が霧散する前にもう一撃。ホブゴブリンの腹部に攻撃が当たって大きく後ろに投げ出されてどうと倒れる。

前方にあったメイスで威力が弱められているのでまだ息はあるだろうが、セイラと合流するのが先だ。ルーベンはセイラの消えた方角に走った。

セイラはテレリ村とは逆方向の山奥に向かった。ゴブリンの団が通った場所は下生えや低木の枝が折れているので、明かりが無くとも迷うことはなかった。ほどなく前方がボツと明るくなり、剣を握り直したルーベンは更に足を早めた。

そこには岩を背にして孤軍奮闘するセイラがいた。足元には数匹のゴブリンが倒れている。セイラは腕力の弱さを盾で補う戦い方をする。そう、あの細腕でルーベンのような大剣を振るうのは無理なのだから。

即席のかがり火はゴブリンたちとセイラのちょうど中間だ。セイラは右手に種火の着いた火炎瓶を掲げてゴブリンを押し止めていた。

体力に難があるらしい息の上がったメイジの命令にゴブリンたちは躊躇していた。火炎瓶を気にせず攻撃しろと言っているようだが、少なくとも一匹は確実にあれを食らうことになるので先鋒を押し付けあっている。

再び怒号を発したルーベンが一点突破の最短距離でセイラを目指す。ゴブリン集団の左翼に突進し、逆手に握った剣を左右に持ち替えながら8の字に振り回してセイラの元に辿り着いた。追いつがってきた一匹を振り返りざまに切り下ろす。その後ろから襲い掛かってきたゴブリンの顔面を殴り飛ばすと、ルーベンの背後からセイラが火炎瓶を投げる。絶妙のタイミングだ。

火たるまになったゴブリンは別のゴブリンに抱きついた。ルーベンは哀れな二匹をまとめて剣で突き通す。燃えていない方の腹を蹴って剣の自由を取り戻し、ぎろりと周囲をねめつけた。

ゴブリン七、八匹なら苦戦しないし、向かって来るならもっと困らないが、他に魔法使いがいるとなれば話は別だ。火炎瓶はまだ残っていても、無闇に使うと燃え広がって山火事になる危険もある。

ルーベンがセイラに目配せした。セイラとは十五のとき騎士団に入って以来二十年の付き合いだ。すぐさま意図を理解して戦闘態勢になる。

ずいっと進み出たルーベンが大剣で空を切り裂いた。高速で放たれた風刃をもろに喰らった二匹が崩れ落ちる。しかし二つ同時に放ったもう一方は、メイジの衝撃波で相殺された。力の源は違えど使える魔法は似通っている。正反対の力がぶつかると、よほど力の差がない限り打ち消し合って霧散する。それでもメイジの魔法詠唱を阻止することはできた。

セイラの発動した呪式が辺りを白く染める。魔法の光を灯す呪式の光量を強くして目潰しにしたのだ。セイラの頭上五十センチの光源は、斜め後ろからの光であるためルーベンには影響しない。他方、暗闇に強いゴブリンたちにとっては苦痛になる明るさだ。

かいっばい踏み切って目を押さえるゴブリンの中を駆け抜けた。すれ違いざまにメイジの首に大剣を叩きつける。頭部を失った血塗れの身体がゆっくりと倒れた。眼前に剣をかざしたルーベンが静かに振り返る。固くまぶたを閉じていても眩しいが、あと三秒で魔法の光は消える。無言で数を数え、周囲に『夜』が戻ると同時に開眼した。

ゴブリンを挟撃する策はほぼ上手くいった。セイラは無傷だが、ルーベンは少々拙いことになっていた。ゴブリンどもの武器はお粗末で、錆びたショートソードや棍棒だったが、金属鎧を過信したせいで軽傷を複数負った。神に回復を祈ると殆どの傷はすぐに消え痛みも薄らいた。しかしなぜか塞がらない傷口があり、そこからはたらたらと血が流れ続けている。

ゴブリンの武器を改める、乾いているのに異臭を放つ血のりがべったりとこびりついた剣が混じっていた。恐らく毒の血を持つ魔物でも切ったのだろう。回復魔法では毒を浄化できないが、寒気に襲われたルーベンは法力を高められない。セイラがルーベンに解毒魔法を使おうとしたそのとき。

「ガランハ、デッハー！」

怒りで血走った目をしたホブゴブリンがメイスを打ち下ろした。咄嗟にセイラを突き飛ばしたルーベンは自らも横へ飛んだ。足がもつれてよろけたすぐ横の地面にメイスがめりこむ。

二人は同時に構えて迎え撃ったが、毒に侵されたルーベンはやはり動きが鈍い。ホブゴブリンは歪んだ長柄を片手で持ち、ルーベンと力比べをしている。そしてフレイルで膝を砕こうとしたセイラを片手で盾ごと払った。腕の一振りでも吹き飛ばしたセイラは何もない場所に落下した。

「セイラ！」

何度か呼ぶと頭を振りながらセイラが上体を起こす。ほっと息つく暇もなく、ルーベンはホブゴブリンに圧倒され始めた。今の彼女の腕力ではホブゴブリンと対決するのは無理だった。そう、あんなに細い腕では……、あんなに小さな身体では。天性の武芸の才も非力な肉体では活かしきれない。

しかしセイラは立ち上がった。木の幹に背を預けて呼吸を整えている。深呼吸をすると両手を広げて呪式の詠唱を始めた。腕力が無い代わりに今の彼女には強い法力がある。

謳うように、囁くように、そして踊るように目の前の空間を撫でる。法力が光の尾を引いてナルディアの聖印を形作った。ルーベンの表情が引き締まる。聖印で神の力を使うためのチャンネルを開いたということは、本詠唱も長くなるということだ。二段階詠唱となれば最低でも三分は必要である。

ホブゴブリンを相手に現在のルーベンは永遠にも等しい時間だ。だが、泣き言を言うつもりはない。詠唱中の術者は無防備である。ルーベンを守らねばセイラの生命は無い。いや、女性ならば死よりも辛い目に合うだろう。

法力の高まりはホブゴブリンにも恐怖を与えたようだ。ルーベンを突き放してセイラへ駆け出した。逆手に握った大剣を杖にして身体を支える。ルーベンは素早く呪文を唱えて三つのつむじ風を発現させた。

ホブゴブリンは木の葉を巻き上げる風の渦を無視してメイスを振り上げたが、むき出しの部分にビビッと筋が走り、一拍置いてそこから赤黒い血が吹き出た。焦って飛び退いたホブゴブリンがメイスを放す。風の集中攻撃を受けて打楽器にされたメイスが地面に落ちると攻撃が止んだ。

セイラを中心にした三角形の陣は、一定距離に近付いた対象に無数の風の刃を浴びせる。金属のメイスは刃が残ったが、角度が良ければ人の腕を輪切りに出来る威力がある。ホブゴブリンの太い腕や足もざっくりと切られていた。

離れれば風魔法の攻撃がないことと、法力消耗後の虚脱で動けないルーベンを確認したホブゴブリンは己の傷を魔法で回復させる。傷は深く数も多いので、二度、三度と暗黒神に祈るとやっと出血が止まった。

かなりの深手もあったようだし魔力も使わせた。傷は癒やせても失った血と体力までは回復できない。メインの武器は守りの陣の範囲内に落ちたので、拾うには腕一本犠牲にするくらいの覚悟がいる。

風の陣は一度発動すれば術者の生死を問わず存続するタイプなので、その間はセイラの安全が確保できる。だがセイラが使おうとしている魔法は、風の守りが消えてからも一分以上の詠唱が必要だ。聖騎士ルーベン・デーヴァは愛用の大剣を差えた両手で構えた。

ホブゴブリンは落としたメイスの代わりに、部下の持っていた棍棒とショートソードでルーベンに対抗した。一人と一体は激しく斬り合い組み付いて揉み合った。徐々に押されたルーベンのショルダーガードや脇の留め具が弾け飛ぶ。

ホブゴブリンは両手の武器を交差させて大剣と力比べを挑んだ。ルーベンを屈服させようとホブゴブリンが一步前に出た。踏ん張ったルーベンの爪先が地面に沈む。とうとうがっくりと膝をついたルーベンは、頬や髪に当たっていた風が止まったことに愕然とした。ホブゴブリンはまだ気付いていないが、それも時間の問題だ。

押されていたルーベンの膝が浮いた。ホブゴブリンの顔に動揺が走り歯をむき出して押し戻す。だがルーベンはそれ以上の力を発揮してとうとう立ち上がった！

「ナルディアよ！ ナルディアよ！ 我に力を！ 愛する者を守る力を与え給え！！」

鬼気をまとったルーベンは怒涛の打ち込みでホブゴブリンを押し始めた。神の名を高らかに叫ぶ姿はバーサーカーのようだ。毒が理性を侵したのか、神が呼び声に応えたのか。人間の領域を超えた力で魔物を凌駕した。

ショートソードを握ったホブゴブリンの左腕が宙に舞う。しかし魔物は片腕と引き換えに



棍棒でルーベンの胸部を潰した。大地に投げ出されたルーベンはなおも立ち上がろうとあがく。

鎧がひしゃげ折れた骨が肺に食い込んでいた。大量の血が口から溢れて咳き込む。あまりの激痛に気を失うことすらできず、それでもまだ戦おうとした。

「……………至高なるナルディアの御名において、聖なる力ここに現れん！」

セイラの呪式が完成した。彼女の背後につららのような光のトゲが扇状に広がる。教団本部の大聖堂に奉られた神像のように、光に照らされたセイラは美しかった。

『穢滅の聖光！！』

光に埋め尽くされたホブゴブリンが塵と化して闇へ還る。しかしそれを見届げる前にルーベンの意識は白く塗り潰された。

ルーベンはまばゆい光の中で目覚めた。ナルディア神のおわす天界に昇るのは神聖騎士の究極の願いである。そこには苦痛も苦悩もなく素晴らしい世界だと伝えられているのに、ルーベンの身体は重く強張っていた。楽な姿勢をとかすかに身じろぎして痛みを呑んだ。小さな手がルーベンの肩に乗せられた。

「まだ動いてはだめだ。もう少し明るくなったら助けを呼んでくる。それまではじっとしていよう」

どうやら神の御元に行き損ねたらしいが、セイラの声は耳に心地良く響いた。空は濃紺が薄らぎつつあるグラデーション。魔物の跋扈する夜から人間の活動する昼へと変わる途中だった。鎧は脱がされ身体のおちこちに包帯が巻かれているが、特に胸が痛んで息苦しい。

「水を……………」

口の中に鉄臭い血の味が残っている。口を濯ぎたかったし喉も湿っていた。革の水袋を渡そうと屈んだ少女の肩から大きすぎる服が滑り落ちた。ささやかな胸の膨らみと薄く色づいた唇が朝日に照らされてルーベンの目に焼きついた。

白い肌を朱に染めて身体を隠すセイラと対照的に、ルーベンは蒼白な顔色だった。血の気が無いのは大量に血を流したからだけではない。なぜ服があんなにも大きいのか。そしてなぜこんなに幼く見えるのか……………

「セイラ……………、セイラ……………。まさか、また……………」

ルーベンの傷は致命傷だったはずだ。しかも毒に侵され深手も多々あり、『守りの風』に法力を継ぎ込んで心身ともに限界だった。セイラは解毒と傷を治す魔法をどだけ使ったのだろう。

通常の間人が限界を越えて魔法を使えば衰弱して死に至る。しかし今のセイラはある意味死から縁遠い存在だった。彼女は『若返りの呪い』に縛られていた。

五年前セイラとルーベンは、不老不死を求めて邪教を信望する魔術師討伐の任を命じられた。小さな館の中で怪しげな実験に夢中だった魔術師はあっさり捕らえることができた。しかし魔法を封じるためのさるぐつわが緩み、怒り狂った魔術師は己が生命を邪神に捧げて一世一代の『死の呪い』をセイラに掛けた。

この魔法を使うには相手を視認しなければならぬ。たまたまルーベンは縛り上げた魔術師の後ろを歩いており、先導していたセイラが標的になった。セイラとて聖騎士になるほど強力な法力を持っている。神に祈ってレジストしたが、生命を代償にした呪いを完全に跳ね除けることはできなかった。

身長一七〇センチのルーベンよりも体格の良かったセイラは、細身で小柄な美しい女性になっていた。外見だけは二十代後半と『元』のままだったが、容姿は彼女が救いを求めたナ

ルディアそのもの。本来は中性のナルディアが神々しい容貌をそのままに、女性の肉体を持って顕現していた。

事態を知った教団は騒然となった。高位の司祭や聖騎士たちが数十人掛かりで儀式を行っても呪いは解けなかった。よくよく精査した結果即死の呪いは、徐々に若返って終には無となる『緩慢な死』の呪いに変化していた

不老不死は若返りとも言え換えられる。魔術師は呪いにアレンジを加えたのだ。セイラは肉体と法力の割合が人間と神の中間、ナルディアのしもべたる精霊に近い状態になっていた。以前より格段に強くなった法力は人の身には余る。肉体が消耗すると精神とともに存在が弱まり、それを防ぐために退行——つまり肉体を若返らせて己を維持する仕組みらしい。

解呪の失敗は回を重ねるごとに呪いをより強固にする。儀式は神に救いを求める祈りに変更された。教団本部にいた神官と騎士は位階を問わず、総出で呪いを消し去り給えとナルディアに乞い願う。無論ルーベンも祈りに参加した。神像の前で一心不乱に祈るセイラに神は慈悲を与えた。

——善きことをせよ。

聖堂に光臨した神の声は別の場所で祈っていた者にも確かに聞こえ、光に包まれた姿がその目に写った。

セイラは、人々を助けて徳を積むことで体内の穢れを払えるのなら、功德の旅に出ると神の御前で誓った。本物のナルディアは静かに微笑むと、セイラに祝福を与えて天界へと戻っていった。

光が消えた後、セイラは魔法石を握っていた。法力も魔力も魔法を使うためのエネルギーである。強い魔法や魔力、法力——人間界に残った純粋なエネルギーが結晶化したもので、ごく稀にしか発見できないアイテムだ。小豆大の魔法石は見る間にセイラの手の手で溶けて消えた。

数日後セイラの外見年齢は元に戻った。一瞬で戻ったのではなく、数日で数年分の成長を果たした。同時に髪も黄金色から徐々に黒くなっていった。今回は神の祝福で一時的に呪いを跳ね返したが、これからは善行と魔法石で呪いに打ち勝つのだ。

「大丈夫、またすぐに戻る」

小さな手には赤と青の魔法石があった。しかし何故か魔法石は形を成したまま。もう一つあった緑のものを吸収したばかりなので今は反応しないのだと、セイラは痛みと杞憂で眉を潜めるルーベンをなだめた。確か以前にもそういうことがあったような気がするが、ルーベンの思考は乱れていた。

半精霊のセイラは魔法石発生条件の一つ、強力な魔法を操れるようになった。善行を行いながら魔法を使えば、レアな魔法石が生成される確率も上がる。だがしかし、強力な魔法は法力が枯渇する危険も増す。かといって高まるエネルギーは放出しなければ肉体が耐えられない。

「心配するな。ほら……」

口調だけは以前のままのセイラが落胆するルーベンに顔を寄せた。ルーベンがセイラを愛しているように、セイラもまたルーベンを愛していた。もちろん結婚前に肉体関係を持つなど有り得ない。二人にとってはキスが愛の交歓だ。

軽く咳払いしたルーベンが顔を寄せると「違う！」と拒絶された。傷付いたルーベンを尻目にセイラは桜色の爪で自分を指差した。

「よく見ろ！」

彼女の指は頬の上を示している。目を見開いて「ほら！　ここだ！」と訴えた。新緑の瞳にルーベンの四角い顔が映りこんでいた。

「目の色が……」

「そうだ！ また少し呪いが解けたんだ！」

晴れ渡った空はナルディアの青。澄んだ青い色は生き活きとした緑の瞳に戻っている。ホブゴブリンとメイジのコンビにゴブリンの群れから村を救った。全く得られないこともある魔法石が三つとは、ナルディアもさぞお喜びくださったのだろう。

それにしても……、とルーベンは考える。神の似姿は夢のように美しく、今のセイラは十二、三歳にしか見えない。それでも間違いなく愛した女性なのだが、かつてルーベンが心魅かれたのは見上げるほど大柄な逞しい女聖騎士だ。

ルーベン・デーヴァがセイラ・レイハンという存在を愛していることに変わりはないが、どちらの彼女に魅かれているのかは分からなくなっていた。

一人の女性の二つの姿、様々な年代にルーベンの気持ちは揺れ動いていた。真実の愛を誓ったはずなのに、まるで浮気でもしているような後ろめたさを感じてしまう。己の浮ついた愛は祈りの時間に懺悔することにして、ルーベンは無邪気に笑うセイラに口付けた。

【了】

## ある王様の日。

鋼雅 暁

ある王様の日。

朝議を終え重臣たちが引き揚げた後の謁見の間で、王は玉座に腰かけてぼんやりとしていた。常に人に囲まれている彼にとって、重臣たちが出払ったこの瞬間が、数少ない『独りきりになれる時間』である。

彼は、こちらの世界で十八歳になったばかりの若者だ。こげ茶色の髪に黒い瞳、すらりとした背が高い。冠と剣には彼の『守護石』であるルビーがちりばめられ、纏うマントは緋色、盛装すれば大層見映えのいい青年王である。

「はっ……」

彼は、大きなため息を吐いた。

王という肩書を与えられ、王宮に住み、御璽をもたされてはいるものの、自分がこの国の王である実感はない。むしろ、政《まつりごと》になれた老臣たちにいいように操られる『傀儡』であるそのことを、自覚していた。

普通のサラリーマンとして現代日本で暮らしていた彼にとって、異世界はあまりにも「違うところ」でありすぎた。現代日本からヴィクトリア朝のようなところへ飛ばされて、両者の世界の共通点を探す方が難しかった。

テレビは見たいしゲームもしたい。しかしこの世界には、そんなものは何一つ存在しない。本を読もうと思っても字が読めないため、面白くもなんともない。

「ああ、あっちが懐かしい」

そんな言葉が、ついつい、出てきてしまう。

思い出されるのは畑から収穫したばかりの野菜を持ってきてくれる祖母の目に焼けた笑顔や、早くしなさいと急ぎ立てる母の声。

早々と嫁に行った年の離れた姉と最後に会話したのはいつだったか。父とは、多少の確執があったが就職してからは母の目を盗んでこっそり晩酌をする仲になっていた。

「みんな、どうしてっかなあ……。俺が王様やってるなんて、笑うだろうなあ……。ばあちゃんは心配するだろうなあ」

いや、案外、「結構結構、頑張るなあ！」と喜んでくれるかもしれない。

「ばあちゃん、こっちは農業が盛んだぜ……」

つぶやいた王の口元が僅かに緩んだ。

\* \* \*

何の因果か知らないが、気が付いたらこの世界の貴族に転生していた。もちろん、彼自身が望んだわけではない。

どうして現代日本からこの世界へやってきたのか、全く訳が分からない。

神様らしきモノの説明もないしGMらしきキャラの弁解もなかった。もっと言えば、彼は、自分が現代日本で死んだ記憶もないのだ。

とにかく、気が付いたら彼は十八歳くらいの貴族だったのだ。しかも、どうやらかなり身分の高い家の嫡男らしい。

長らく生死の境を彷徨った嫡男が息を吹き返したとかで、お屋敷はお祭り騒ぎだった。

多少記憶がおかしかりうが、挙動不審だろうが、医者が、「奇跡的に生き返ったお方です。ありがたや……」

と、聴診器を当てたあとに手を合わせてくれるのだから、問題はなかった。

元気になってきたら、ベッドに寝ているのが退屈になった。

父に「退屈だ」と告げたら、宮廷への出仕をすすめられた。  
「何もなくてよいぞ。また倒れて十年も生死の境を彷徨われたら溜まらぬからな」  
何かせよと言われても困るのだが、状況把握のために宮廷で好き勝手して呑気に暮らしていたら、  
一体彼の何を見込まれたものか、『暗君を斃すグループ』にスカウトされた。  
「どこでも、下剋上ってのはあるんだな……」  
病気快癒の挨拶をしたときに、馬鹿そうな王だとは思った。重臣の苦勞は相当なものだろうということも、すぐにわかった。  
しかしその馬鹿な王を『民のために』玉座から引きずりおろそうとは思わない。なにせ、この国にそこまでの愛着はないのだ。  
だが、涙ながらに懇願する年老いた男たちの積みを断るのも面倒なので適当に相槌を打っていたら、  
なんだかうまいこと担ぎ上げられて暗君の首を落とすに至った。  
「さあ、いまですぞ！」  
「え、お、俺でいいの？」  
「どこまでも謙虚でいらっしゃる！ 我らは、そんな貴方だからこそついてきたのでございます。さあ、今こそ！」  
「ええい……ばあちゃん、俺に力をお！」  
剣を握ったのも初体験であれば、人の首を切り落としたのも初めてである。  
彼の手が震えていることに、何人が気付いただろうか。  
テンテンと転がった王の首が恨めし気に虚空を見ていた。その目が忘れられず、今でも夢に見ることがある。  
そしてあれよあれよという間に玉座をおしつけられて、はや一週間か、十日か――。  
王様業など、テレビでしか知らない。某英語の国の皇太子とか、皇太子妃とか。微笑みの国の王様が国会で演説していたか。  
とにかく、あの程度しか知らない。  
それ以前に、この国の政治の仕組みも法律も理解できていないので、「国務」だの「公務」だのの書類一枚読むのに難儀する。大臣ともは適当に印を押してくればよいと言うが、そこまで無責任なことではできないと思ってしまうため、ついつい要らぬ時間をかけてしまう。  
重臣たちが苛立つのもわかる。きっと、無能な王として遅かれ早かれ、彼も玉座から引きずり降ろされるのだろう。  
だいたい、王族だの貴族だのといった身分制度は物語の世界でしか知らない。  
そのため侯爵と伯爵どっちが偉いのかとっさにわからない。  
白いひげを蓄えた宰相が、  
「ナントカカントカ侯爵がお見えです」  
と言ってくれる。が、ナントカカントカが名字であるとは限らないため、いちいち、  
「それは誰だ」  
と聞かねばならない。  
例えば今も、  
「グランカーレイ伯爵が謁見を願ひ出ております。お会いになりますか？」  
と、宰相が小走りにやってきて告げた。だが、伯爵のフルネームが思い出せない。当然、伯爵が自分に会いに来る用件も思い出せない。  
それを察した宰相が、  
「第六代グランカーレイ伯爵エドワード・タウンセント＝ジョーンズ。金髪碧眼、背が高いがかなり太り過ぎ、右目の下に大きな黒子あり。産業施設や庶民の労働環境改善に熱心な六五歳です」  
彼の耳元で手際よく囁いてくれる。  
「……その伯爵が、俺に何の用だ？ 今、産業に関わる法令は整備していないし視察の予定もないだろう？」

「はあ、それがわたしにもよくわからないのです」

「用件が分からぬうちに断るのも、なあ……」

「ですなあ……」

「よし、会おう」

「ですが、陛下、厄介な話の可能性も……」

「あのな、今までに『厄介ではない話』などがあったか？」

宰相が返事をし終わらないうちに、謁見の間の扉が外から勢いよく開かれた。開けたのはもちろん、グランカール伯爵だ。

伯爵は、王に呼ばれもしないのに玉座に近づき、勝手に跪いた。宰相がムツとした気配がする。本来なら、逐一王の命があって行われることなのだ。

「国王陛下におかれましてはご機嫌……」

「挨拶はいい。伯爵、用件は何だ」

「はい、わが娘エリザベスをご紹介に参りました。エリザベス、こっちへ」

謁見の間に入ってきたエリザベスは、ワインレッドのドレスを着て髪を高く結い上げた少女だった。ドレスの裾を掴んで、するすると華麗に歩み寄ってくる。

エリザベスは、父親とは対照的に華奢な身体だった。黒い髪に黒い瞳、緊張のせいだろうか唇が渴いている。

跪いて挨拶をしようとするのを、王は手をあげて押しとどめた。

この国はとにかく平伏するのだが、彼は、どうもそれが気に入らない。ことに、明らかに自分より年上の人間や女性たちに「ははーっ！」とされても、ちっともいい気分はしない。

朝起きたら、着替えや朝食をしたくするメイドたちがベッド脇で這いつくばっている。

一步部屋の外に出れば、廊下ですべての人間が這いつくばる。犬や猫まで座らされる。

おかげで彼は、もっとも傍近くに仕えてくれる王付きメイドや家臣たちの顔と名前がちっとも覚えられずに困った。なので、宰相や自分の傍にいるすべての人に「平伏は省略せよ」と命じてある。

ちなみに貴族たちは、王にぺこぺこ頭を下げるのが仕事の一環のようであるし、心をこめて下げていけるわけではなさそうなので、放ってある。

用があるときだけ、王自らが頭をあげよと命じる。

「エリザベス、年齢は？」

「はい、十七になりました」

こちらの国では結婚適齢期である。

「伯爵、娘を差し出した見返りは何だ？ 王たる俺に差し出すとは、そういうことだろう？ 後宮に側室として入れるのか？ それとも、女官として働かせるか？」

伯爵の肩が、面白いほどに揺れた。動揺する父をよそにエリザベスが、

「陛下は、庶民の生活をご存知ですか？」

と、言った。

「民は重税に喘いでいます」

「エリザベス！」

父が顔面蒼白になった。だが娘は一步前に出た。どうやら父と娘、王に謁見にきた目的が違うらしい。

「町には物がなく物価はあがるばかり。やっとの思いで収穫した農作物は、ほとんど役人に取上げられています。民は……どうやって暮らしていけばいいのですか」

「まて、そんな話は聞いたことがないか？ 宰相、知っているか」

いいえ、と、宰相も首を横に振る。

「エリザベス、続けなさい」

と、宰相が促す。

「はい。わたくしは、町に渦巻く庶民の嘆きの声を届けに参りました」

「これっ、エリザベス、やめんか！」

父が娘のドレスを引っ張るが、その手を王が止めた。

「陛下、お願いでございます。税を軽くしてください。商人の行き来制限を撤廃してください。物が

……食べ物がない。子供も、老人も、飢えています。もう、田畑を耕す元気もありません

どうかおねがいをいたします、と、エリザベスが訴える。

ふむ、と王は唸った。

「なあ、エリザベス」

「は、はい」

「それってさ、本来なら然るべき役人を通すべきことじゃねえの？ 役人はどうしたんだ？」

陛下、と、それまで縮こまっていた伯爵が、手をあげた。

「怖れ乍ら、申し上げます。町の役人たちは身分に釣り合わぬ豪邸に住み、女を侍らせ、毎日宴会三昧で肥え太っています。なぜだかおわかりですか？」

「……民が収めた税を掠め取ってるってことか」

「ご明察でございます」

どこの世界にも、いるのだ。そういう輩が。どうしたものかな、と腕を組む王の横で、宰相が冷たい声を出した。

「エリザベス、王への直訴は死罪と知っての事か」

「はい。もちろんでございます。……父と共に、家の中を整理して参りました」

「伯爵、そういうことか？」

いいえ、と、伯爵がため息をついた。

「娘を陛下の側室としてお預けした後、わたしが改めて調査し、直訴するつもりでした。まったく、エリザベスが直訴してしまうとは……」

なるほど、と宰相が笑った。

後宮の女官や后妃は、王の直属の部下だ。王直属の部下を始末できるのは王自身だけ、司法の手も及ばない。

伯爵は始末されても娘は生き延びる可能性がある。

「伯爵、考えましたな」

「恐れ入ります」

しばらく何事かを考えていた王は、玉座から降りた。

宰相が静止するのも構わずにエリザベスに近寄り、その手を取った。およそ貴族令嬢の手とは思えぬ、荒れた手だ。

「俺の、ばあちゃんの手と似ているな」

「え？」

「畑を耕している者の手だな。伯爵邸の庭は、畑になっているのか？」

はい、と、エリザベスが頷く。

「庭で野菜を作り、民に分けています。そうでもしないと……町は死んでしまいます」

ならばこの直訴、聞いてみる価値はあるのかもしれないと、彼は思った。

「宰相、どの程度の税が民に課されているのか、どの程度が国庫に納められているか、調べて報告しろ」

「はい。かしこまりました」

「伯爵」

「はっ、はい」

「エリザベスを連れてきてくれたこと、礼を言う」

王は、背筋をピンと伸ばして歩き出した。謁見の間を出たところで、くると振り返る。

「何をしている、エリザベス。町を案内しろ。伯爵、町の実情を宰相に事細かに、ありのままを報告せよ」

小走りで王のそばに駆け寄るエリザベス。その少女を、王が静らかにエスコートする。

今までに見られなかった光景だ。

謁見の間を出ていく二人を見送りながら、宰相はこの国が動き出したのを感じた。

「異界から遣わされた我らの新王。この国を頼みましたぞ」

結局その日、王は一日不在だった。

「帰ったぞ！ 宰相、一日留守にしていた悪かったな」

「いえ」

戻ってきた王は、埃まみれだったが、生き生きしていた。

「畑を耕してみたぞ。明日は筋肉痛だぜ……。やっぱ、ばあちゃんはすげえや

嬉しそうに、エリザベスと共にあちこちを視察した結果を喋る王は、輝いている。

「宰相、明日はもう一度、エリザベスと視察に出てくる。夕方、臨時の会議を開くぞ」

「御意」

「王は、エリザベスを妃に迎えるつもりだろうか……？」

そんな憶測が飛び交っているのを、王はまだ知らない。

——了——



## 使い魔の休息

なぎのき

1

俺は黒猫のグリエル。  
使い魔歴二年。実年齢四歳。オス。人間の年齢では三二歳だ。人間でいうアラサーとやらの立場にいる。らしい。  
こんな俺だが野望がある。  
使い魔としての役割を全うすれば、上級使い魔にステップアップ出来るらしい。  
しかも嬉しい事に寿命が延びる。聞いた話では百年生きた例があるとか。  
——百年かー。  
猫の平均寿命なんて十五年そこらしいので、もしこれが叶うなら破格の報酬だ。  
人間と接しているとどうにもその時間に縛られる。人間が感じている時間の流れは俺達とは別だ。正直、人間は時間の使い方が下手くそだ。もっと効率のいい方法を取れないものかと常々思う。だがこの考え方は、きっと『寿命』という制約の中で生まれたものだ。  
仮に上級使い魔になって寿命が延びれば、時間に対する考え方が変わるのかも知れない。  
——どうなんだろうなー。  
俺はお気に入りの壁の隙間でまどろみながら、そんなことを考えていた。  
——おっと。  
『使い魔』の依頼が入った。  
最近のお得意先は『二階堂悠里《にかいどう ゆうり》(二七)』だ。先日解決した人間同士の騒動は俺が活躍したからだとか言っていたが、あんな道案内程度、誰だって出来る。  
俺はもっと大きな事件にかかわりたい！  
そして大活躍したい！  
でもって寿命を延ばしたい！  
と息巻いてみるものの、現実はその甘くはなく、そんな大事件は滅多に起こらないのだそうだ(悠里の姐さんがそういう事件にかかわらないだけかも知れないが)。  
そう言えば俺のじいちゃんが言ってたっけ。  
地道に一步ずつ。何事も積み重ねが肝心だ。  
——あーあ。  
どうにかして一発でポンと上級使い魔になれないモンかね。  
と色々考えても埒が明かないので、姐さんの依頼を受けることにした。  
やっぱり積み重ねしかないのかなと思いつつ、姐さんの元に向かう俺だった。

2

「おお、来たわね」  
姐さんは顔をほころばせて、俺の頭を撫でる。  
おいおいよしてくれ。俺はこう見えてもお前より年上になるんだぜ？  
と凄んでも、それは姐さんには伝わらないらしい。  
「今日のお仕事はね、迷子の子猫探しなの」  
迷子だあ？  
俺は少しでも嬉そうな顔を姐さんに伝えるため、露骨に眉間にしわを寄せた。  
でもやっぱり伝わらなかった。  
「さすがに人間サイズだと小さな隙間まで目が届かないから、その辺頼んでもいいかな？」  
もちろんだ。そこに『猫』の『使い魔』としての意義があるのだ。

「じゃ、後はよろしくー」

姐さんは子猫の名前を呼びつつ、猫じゃらしを大量に持ち、捜索の旅路に出た。

——あれじゃ見つからんと思うかなー。

そう思いつつ、俺は俺で勝手に行動を開始した。

地元のネットワークを駆使し、最近生まれた子猫にあたりをつけ、母猫を訪ねて子育ての相談に乗ったりもした。

だが迷子の子猫の情報は入手出来なかった。

——むう。地元ではない？ これは姐さんに確認しないとイケないな。

俺は、姐さんの顔をもやーっと念じた。

『なにー？ 見つかった？』

いやいや。まだです。

『なんだ、まだなんだ』

なにそのあからさまなガッカリ感。

『で、どうしたの？』

いえ、カクカクシカジカでして。

『ふうん？ 地元の子じゃない可能性があるんだ？』

そのようで。

『おお、そう言えば飼い主さん、先週越してきたばかりとか言ってたよ』

それだ！（と言うか、それを早く言って……）

『新人さんだから、猫さんの連絡網使えないのかー……』

いや、まだ手はあります。

『え？ どんな？』

新人なら、逆にこの辺で見かけないはず。逆転の発想ですよ姐さん。

『おおーさすがですねー』

いやいや。それほどでも。

『じゃあよろしくねー』

はいって、あれれ？ 姐さん？

その後、いくら呼びかけても姐さんが応じる気遣いはなかった。

### 3

逆転の発想はいいとして、それをどう実行するかだ。

俺はとりあえず頭数を揃えた。

「いいかお前ら」

皆一様に、てんでばらばらな姿勢で俺の言葉に聞き入った。

「子猫が迷子になっている。それも先週ここに来たばかりだ」

特に皆からの反応はなかった。

「これからローラー作戦を実行する。各自見たことのない子猫がいたら、即俺に報告するように。以上、健闘を祈る！」

にゃー。

かくして、『子猫捜索大作戦』が開始された。

### 4

ほどなくして。

俺より一つ下の三毛猫が報告をあげてきた。

「何！ 見つかった？」

にゃー。

「近所の子女子高生に餌付けされてるだど？」

にゃ、にゃにゃー。

「しかも抱っこにはっぺすりすりだと！ むう。だが相手は子供だ。やむを得ない」

にゃー。

「よし、案内しろ。俺は姐さんに連絡する」

俺はさっきより強く姐さんの顔を念じた。

『今度はなにー？』

見つかったようです。

『え、ホントに？』

俺が嘘ついてどうすんですか。

『そりゃそうだわ。で、どこにいるの？』

これから向かいます。姐さんは俺の思念を拾って下さい。

『らじゃ、らじゃー』

——ホントに大丈夫なのかな……。

一抹の不安を隠せない俺だった。

5

親子は無事に対面を果たした。

姐さんが気を利かせて母猫を連れてきたので、感動の再会——になるはずだった。

子猫が女子高生にすっかり懐いてしまい、それを引き戻すのに多大な労力を要したのだ。

姐さんは、女子高生と子猫を説得した。

母猫も涙ながらに訴えた。

そのかいあって最終的には母猫のもとに戻ったが、どうにも猫缶がお気に召したようで、子猫はちらちらと女子高生を見ていた。

——これだと、次は『迷子』じゃなく『脱走』だな、こりゃ。

ともあれ。

皆も回結して捜索してくれたし、俺も顔役として鼻が高い。

——これで少しは上級使い魔に近づけたかな。

上級使い魔への道は遠く険しいが、こうやって一歩ずつ積み重ねていけば、いずれは辿り着くだろう。

——早くデカイ事件とか起きないかなー。

そんなことを思いつつ、いつもの狭い壁の隙間でまどろむ俺だった。

—了—

## コラム 短編というジャンル

わたしは常々、短編というのは一個のジャンルとして他と切り離して考えるべきではないかと思っている。

文字数を短くしようとすればするほど、そこに詰め込める情報の量はひどく限られてくる。長編であればイメージを補填するためにじっくりと描かれる情景描写、読者を納得させるために多く騙られる心理描写など、これをいかに短編向けに軽量化できるかが腕の店どころとなる、省略の芸術でもある。

よって、おうおうにして短編に使われる言葉は読者に対してダイレクトに情報を与えるものが選ばれるものだ。

真っ赤ないちごであれば、これを「赤き衣の上に無数のタネを散らした紅玉のごとき…」などとひねらず、「真っ赤に熟したイチゴが」とただそっけなく書くのがセオリーである。

このそっけない情報を単につないでも出来上がるのは説明文でしかないはず、その説明を丹念に編んで読者の感情を誘導するからこそ短編には短編のおもしろさがあるのだ。

そしてこれは、作家の腕がもっとも試されるジャンルでもあるだろう。

今回、オーバーサーティーではやや長めの作品を発表しているが、本来ならこうしたダイレクトアタック的な文章を得意とする『短編作家』が何人か紛れ込んでいる。

こうした作者の特徴を読み解くのもまた、読書のひとつの楽しみかたではないだろうか



ハバラエティ  
ショートショート



## K氏の独白

七ツ枝 葉

東の地平線から、お天道さんが昇ってきた。空が明るくなっていくにつれて、気温は少しずつ上がっていく。

俺のくすんだ白いボディが、陽の光を反射してわずかに光った。

ああ、今日はいい天気だ。

朝のいい気分には浸っていると、俺の頭の上に、とん、と毛玉が乗っかってきた。

キジトラの野良猫だ。この野郎め、毎朝俺の頭を踏み台にして、塀の上に飛び移りやがる。おかげで奴の足跡が付いちまって、汚ねえったらありゃしねえ。

まあ、猫の足跡が付いたところで、実際はどうってことあねえよ。

俺のボディは、洗っても落ちねえくらい年季の入った汚れが、あちこち滲み込んでやがるからな。そうこうしているうちに、そら来た。あいつだ。

小僧みたいな顔立ちの若い男。なんだか今日は、いつもよりめかしこんでやがるな。

男——ミツルが車に乗り込んで、助手席にバッグを放り投げる。キーを差し込んで回せば、キリキリと音を立ててエンジンが動き始めた。

不穏な音を立てはするが、車は問題なく発進した。

そして俺はミツルを乗せて、通り馴染んだ道に行く。

俺が誰かって？

俺ァこいつを乗せて走る車。平成十二年生まれの、軽自動車だ。

俺がミツルの車になったのは、免許とりたての頃だったな。あいつは高校卒業したばかりの、まだまだ子どもだった。

親父さんから譲られたんだ。何しろ就職直前だったから、自分の金ってのを持ってなかった。カードも作ってなかったし、ローン組んで一台買うなんてことは出来なかったってわけだ。

親父さんは俺を息子に譲ったら、さっさと新しい車を買いやがった。黒いワゴンタイプだ。その新しいワゴンを息子にやりゃあよかったんじゃないかねえかって思ったんだが、さっき言ったとおり、あいつにやまだ資金がなかったからな。まあ、社会に出たての若造にゃ、中古の軽自動車でも充分だってこつたろう。

ミツルは中古の俺でも、自分の車が持てたって嬉しそうだった。暇を見つけちゃ俺に乗って、あちこちドライブに出たもんだ。

ドライブつっても、コースはだいたい決まってる。自宅から、お気に入りのショッピングモールか商店街までの往復。たまに気が向いたらコースをそれて、知らない道路を走ってちょっとだけ冒険するって、その程度だ。

ミツルは車内にたくさんCDを持ち込んで、好きな音楽を聴きながら運転する。売れてんだか売れてねえんだかよく分からねえ、微妙な路線のバンドのCDをな。

俺は自動車だから、音楽の善し悪しなんざ知ったこっちゃねえが、鼻歌交じりにハンドルを握るミツルの上機嫌な顔を見ると、歌ってのはいいものらしい。

俺のCDプレイヤーはチェンジャーじゃねえから、自分で入れ替えなきゃならない。ミツルに限ったことじゃねえだろうが、運転しながらCD入れ替えるってのは危ねえ行為だ。やるならちゃんと停めてからにするべきだ。

最近の車は、CDの中身を全部記憶しちゃうんだろ？ 曲を溜め込めるから、CDそのものがいらなくなる。性能いいねえ、まったく。

おっと、ボンネットの中で、カラカラ音が鳴ってやがる。

嫌だねえ。車ってやつは年を経ると、あちこちにガタが来るようになる。

こんな音がするからって、走行中にどうにかなるこたァねえ。エンジンがあったまれば音は消えるし、先月の車検には引っかからなかった。

だけど用心しなきゃならねえ。古い車は、それだけでいろんな問題を抱えてるもんだからな。

このカラカラ音は、たまたま大したことじゃないってだけだ。車の異常を放っておくと、あとで大変なことになるから注意しろよ。

例えばだ。何年前か、俺のボンネットの中で異常が起きた。エンジンを止めると、シューシューという音がするようになったんだ。

ミツルは俺の中から聞こえる音を訝しんでたが、原因が分からねえから、しばらく放置してた。そんな時、俺の中の一部分が、すでに大変なことになっちまってたんだ。

俺は熱くて熱くて仕方がなかった。だけど、あいつに異常を伝えるすべは、音を出す以外にない。そのサインを見逃されたら、もうどうしようもねえ。

何が起きてたかっていうと、なんとまあ、ラジエーター液のタンクに穴が開いていて、液がダダ漏れだったんだよ。こりゃマズいぜ。

ラジエーターってのは、エンジンを冷やすための重要な部品だ。ラジエーターの中の冷却水が無ければ、エンジンは燃焼し続けてオーバーヒートしちゃう。そうなりゃ大事故になりかねえし、運良く事故を免れたって車体はオシヤカだ。

つまり、俺が死ぬってことになる。

自動車に“死ぬ”って表現はおかしなもんだが、まあ、例えるならそういうことだ。

幸いなことに、本当の大事になる前に修理出来たんだけどよ。あの時、俺は痛感した。そろそろ潮時か、ってな。

俺はもう十年以上走っている。自動車の十年っていやあ、ジジイもジジイだ。あちこち不具合が出てきたっておかしかねえ。

俺は軽だが、走りには自信がある。特に坂道には強い。

他の軽自動車やセダンが、えっちらおっちら坂を昇る中、俺はスピードを落とさず走って行ける。

二車線道路の坂道で、隣の車線の速中をぐんぐん追い抜いて、俺だけは颯爽と昇ってくんだ。痛快だぞ？

ミツルが愉快そうにアクセルを踏むのが、何より嬉しく、誇らしかった。

でも、俺は機械だ。道具だ。使い込めば古くなるし、弱くなる。いつかは引退しなきゃならねえ。

本当ならもっと早く引退するべきだったんだが、ミツルは新しい車を買わず、まだ俺に乗り続けている。

俺はそれを嬉しいと思う反面、焦ってもいた。

古びたジジイ車に乗り続けて、いつかとんでもねえ不調をきたして、ミツルを事故に遭わせるんじゃないかねえかって、ひやひやしている。

古い車に乗り続けるってのは、なかなかリスクの高いことなんだよ。

だからミツルには、早いとこ新しい車を買ってほしいと願っている。そして俺に引導を渡してほしい。

俺はいずれ、必ず寿命が尽きる。その瞬間は、いつ来てもおかしくねえ。

道路を走っていると、若くてひかひかの自動車とたくさんすれ違う。流行りの車だから、デザインもかっこいい。

ミツルも、ああいう人気の車に乗りゃあいいのによ。

なんでいつまでも、こんな古いぼれ車に乗ってんのかねえ……。

やれやれ、エンジンだけじゃなく気も弱くなっちゃった。

年は取りたくねえもんだな、まったく。

ミツルの向かった先は、駅のロータリーだった。普段あんまり用のない場所だ。何しに来たんだ？

ミツルはハンドルを切って、ゆっくりと俺をロータリーの路肩に寄せて停車した。

すると助手席のドアが開いて、誰かが乗り込んできた。女だ。

誰だ？ ミツルの友だちにこんな子いたか？

いや、ミツルが女を乗せたことは、今まで一度もない。

てことは、この子は……。

ははーん。そうか。そういうことか。  
ふふん。ミツルの奴。ガキだガキだと思ってたが、なかなか隅に置けねえな。  
嬉しそうな顔しやがって。鼻の下伸びてるぞ。カノジョにうつつを抜かして事故起こしやがったら、  
ただじゃおかねえからな。  
頼むぜ、俺のエンジン。ミツルの大事なカノジョが乗ってんだ。途中で駄々こねたりしないでくれよ。  
そうか、お前、カノジョが出来たんだな。もう、そういう歳なんだな。

ミツルは海沿いの道路に出て、いつも通り、微妙な路線のバンドのCDをかけて走る。女の子との  
ドライブん時くらい、流行ってる音楽かけてやりゃいいのに。これじゃカノジョ分かんねえだろ、まっ  
たく。

ああ、でも、カノジョ楽しそうに笑ってんな。可愛いじゃねえか。  
何を話してんのか知らねえけど、楽しそうなら何よりだ。  
カノジョがそっと、ダストボックスを撫でた。ミツルより華奢で、白くて柔らかい手だ。指先でなぞっ  
てんのは、俺に乗り始めた頃、ミツルが何か重たいもんぶつけて付けやがった傷跡だ。  
優しい手だな。この子となら、お前、幸せになれるか？  
ひょっとしたら結婚するかもな。そうなったら、いずれ子どもが出来る。  
子どもが出来たら車を買わなきゃな。家族で乗れる、安全安心な新車をよ。

お前がこんなおいぼれ車に乗り続けてきた理由は、俺にゃあ分からねえ。言葉が理解出来れば  
なって思ったことは何度もあるが、それは言っても始まらねえことだ。

お前が長い間、俺を頼ってくれたこと。大事にしてくれたこと。それだけで充分だ。  
いつか別れの時が来る。それまで、もうちょっとドライブしようぜ。  
今日は本当に、いい天気だ。

(了)



## 二人かくれんぼ

フィーカス

—もういいかい？

—まあだだよ。

—もういいかい？

—もういいよ。

—ここなら見つからないよね。

——……

——……まださがしているのかな……

——……早く見つけてよ……

——……さむいよお……

——……みんな、どこに行ったの？

冬の大会が近くなると高校の部活動はより活発になり、時には辺りが暗くなるまで練習が行われる。バレー部のサトミも、この日は部活で帰りが遅くなった。すでに辺りは周囲が見えづらいほど暗い。いつもであれば大したことがない道も、そこに明かりが無いだけで随分と雰囲気が変わってしまう。学校から少し離れると、明かりも人気も少ない場所に入ってしまうのでなおさらだ。

「ここ、夜遅いと暗いし嫌なのよねえ……」

時々変な人が通るとも言われるし、犯罪に巻き込まれる可能性は十分にある。早くこの場所から離れようと、自然と速足になる。

特に不気味なのが、十年ほど前に閉鎖された廃工場だ。未だに錆や油の臭いが漂うこの場所は、通るたびに誰かが出てくるのではないかと不安になる。風でガタン、と物音がするたびに足が止まってしまう。

「ああ……早く帰りたい……」

ますます歩く速度が上がる。そして、もう少しで廃工場の前を抜けようかという、次の瞬間である。

「おねえちゃん」

「ひいっ！」

突然、カバンの紐を引っ張られる感触と共に、後ろから声がした。恐る恐る振り返ると、青い長袖のシャツを着た、小さな男の子が立っている。

「かくれんぼしようよ。お姉ちゃんがおにね」

思わぬ提案に、サトミはきょとんとして立ち尽くしてしまった。

「あの、もう夜も遅いし、それにお母さんたちが心配しているんじゃないか……」

「じゃあ、始めるよ！ 十数えたらさがしにきてね！」

「あ、ちょっと！ そっちは……」

少年は、サトミが止めるのも聞かず、工場の方に走っていった。  
「もう、一人じゃ危ないじゃないの！」  
そう思い廃工場に向かおうとしたが、建物を見上げて思わず足が止まった。  
頼りないロープ一本だけが、敷地への侵入を妨げる。その奥には、使われなかった資材や錆だらけの設備、そして半分シャッターが開いた建物がある。  
「……幽霊とか出ないでしょうね？」  
息を飲みながら、ロープをくぐる。恐る恐る建物の方に近づくと、奥から小さな声で「もういいよ」という声が聞こえたような気がした。  
「……建物の中……？ 気味が悪いわね……」  
思わず息を飲む。できることなら、その場から立ち去りたい。  
しかし、少年を放っておくわけにもいかず、サトミはスマホのライトで辺りを照らしながら、シャッターをくぐる。ライトを向けるたび、何に使っていたのか分からない機械が照らされる。足元には設備や商品の部品と思われるものがいくつも落ちており、時々つまずきそうになった。  
「もう……一体どこに行ったのよ」  
あちこちにライトを当てながら、サトミは少年を探す。しかし、なかなか見つからない。しかし、ふとライトを作業台の下に当てると、見覚えのある青い服のような布が見えた。  
「あ、見つけた！」  
ゆっくり作業台に近づき、その裏にライトを当てると、先ほどの男の子が座り込んでいた。  
「あーあ、見つかった」  
男の子はゆっくり立ち上がると、軽くホコリを払う。  
「お姉ちゃん、遊んでくれてありがとう！」  
「あ、ちょっと！」  
サトミが止めようとするが、男の子は素早くその場からいなくなってしまった。  
慌てて工場の外まで追いかけるが、既に男の子の姿は見当たらない。  
「……あれ、どこに行っちゃったんだろう？」  
シャッターの向こうは、いつもの道とちかちかと切れかかった街灯、資材しか見当たらない。  
「おかしな子」  
首をかしげながら、サトミは帰宅した。

次の日、また部活で遅くなった時にも、廃工場の前には男の子が立って待っていた。  
「お姉ちゃん、またかくれんぼしようよ！」  
「ちょっと、ボク？」  
サトミが止める間もなく、少年はまた廃工場に走っていく。  
「もう……」  
呆れながらも、スマホのライトを頼りにまた廃工場に入る。しばらく周囲を探していると、今度は工場の中ではなく、不使用の資材の後ろに隠れていた。  
「あ、いた！」  
「今日もみつかっちゃったね。遊んでくれてありがとう！」  
「ちょっと待って！」  
引き留めようとしても、すぐに逃げられてしまう。サトミはため息をつきながら、廃工場の敷地から出た。  
「まったく、何なのよ、あの子……」  
一応帰り道の途中も確認したが、やはり少年の姿はない。重たい荷物を抱え、サトミはそのまま帰宅した。

その次の日、この日は大会が間近ということもあり、練習もより長くなった。部の活動可能時間が延長され、中には夕食を持って来る人もいるらしい。  
サトミもこの日はかなり遅くまで部活動をしていたため、学校を出た時にはもう午後八時を回って

いた。

「うわあ……遅くなっちゃったなあ……」

慣れた道とはいえ、足元が見えづらい。時々通る車の明かりで、やっと見える程度だ。

しかし、廃工場が近くなると、車の通りもほとんどなくなる。切れかけた街灯だけの暗い道、なかなか足が進まない。

そして廃工場の前まで来ると、やはりあの少年が立っていた。

「お姉ちゃん、今日もあそぼうよ。きのうあそべなかったでしょ？」

「もう、私は君の遊び相手じゃ……」

「じゃあ、今日もお姉ちゃんがおにね。早く見つけてね」

「ちょ、ちょっと……」

なんとか捕まえようとするが、少年の方が素早い。いつもと同じように、少年は廃工場へと消えていった。

「まったくもう、なんなのよ」

サトミはため息をつきながら、廃工場に入ろうとした。しかしその時、懐中電灯の光が廃工場の建物を照らしていることに気が付き、サトミは思わず振り返った。

「ちょっと、君、ここは立入禁止だよ」

懐中電灯の光が二つに、五十代と思われる男性が二人。どうやら、近所をパトロールしている人たちらしい。

「ここに何の用があるんだ？ 立入禁止の看板が見えないのかい？」

男性のうちの一人在、張られたロープの先にある看板を指さして言った。

「あ、えっと、その……男の子がこの中に入ってしまったんです。それで……」

「男の子？」

男性は見合わせて首をかしげると、もう一人の男性が廃工場に向かっていった。

「とにかく、ここは危ないから、君は早く帰りなさい」

「で、でも……」

「その男の子は、私たちが見つけておくから」

「……」

仕方なく、サトミはその場を後にした。

少年は、まだ私に見つけてもらうのを待っているのだろうか。もし見つからなければ、どうなるのだろうか。そんなことを考えながら、住宅街に入る。

「きっと、見回りの人が見つけてくれるよね」

心配になりながらも思い直したサトミは、家に着くと玄関を開け、「ただいま」と言いながら家の中に入った。

その次の日も部活で遅くなったが、この日は朝から雨が降り続いていた。

傘を差して廃工場の近くを通る。しかし、今日は少年の姿が見当たらなかった。

「……さすがに雨の日はいないか。それにしても、ちゃんと見つけてもらったのかな」

廃工場にライトを当てるが、いつもの古びた建物や資材があるだけだ。人の姿は見当たらない。

連日のかくれんぼに少しうんざりしていたサトミだが、さすがに少年がいらないとしないで寂しくもある。少しほっとしたような、違和感があるような、もやもやした気持ちを抱きながら、サトミはそのまま帰宅した。

それから二日続けて雨が続いた。少年のことが気になり、帰りに廃工場を見してみるが、少年の姿はない。親に見つかって、外に出してもらっていないのだろうか。

「やっぱり、いないのはそれで寂しいわね」

はあ、と白いため息をつきながら、廃工場を後にする。

大会当日の日曜日、サトミたちの高校は練習の成果もあり、一回戦、二回戦と突破することができ

た。今まで一回戦突破がやっとだったため、顧問の先生は大喜びで部員を食事に連れていった。そのおかげで、今日も帰りが遅い。いつもの帰る時間よりは早いとはいえ、辺りは薄暗くなっている。

徐々に晴れたとはいえ、三日間降り続いた雨のせいで、いまだに水たまりになっているところがある。その水たまりをよけながら、少し重い足取りで歩き続ける。

廃工場の前に差し掛かったが、今日は試合の疲れからか、サトミは少年のことなど気にせず家に向かおうとした。

しかし、急に寒気がして立ち止まってしまう。恐る恐る振り返ると、俯いた少年の姿があった。

「お姉ちゃん……なんで見つけてくれなかったの？」

いつものような元気な声ではなく、低く暗い声がサトミの心に突き刺さる。

「ご、ごめんね。大人の人に止められて、それで、その大人の人にもう見つけてもらったのかと思って」

「ぼくは、お姉ちゃんじゃないと見つけられないんだよ。ぼく、ずっとさむい中で待っていたのに……ひとひよ……」

泣きそうな声に、思わずサトミは慌ててしまう。

「え、ちょ、ちょっと、泣かないでよ。また遊んであげるからさ」

「……本当？」

少年はこぼれそうな涙を拭きとると、サトミの顔をじっと見た。

「うん」

「……じゃあ、今日はぼくがおにね。お姉ちゃん、早くかくれてよ」

「え、わ、私が隠れるの？」

「そうだよ。ずっとお姉ちゃんがおにだったから、こんどはお姉ちゃんがかくれる番だよ」

そう言うと、少年は「一、一」と数を数え始めた。

「えー……隠れるって、この中に……？」

約束した以上、このままその約束を破るわけにはいかない。仕方なく、サトミは廃工場の建物に向かった。

相変わらず油臭く、雨が降った後なのでなんだかじめじめする。

「……すぐに見つかれば、すぐに終わるかな」

そう思い、建物の入口、シャッターのそばに隠れる。ここなら、すぐに見つかるだろう。

「……、きゅー、じゅう！」

少年の声が途絶えた。恐らく、サトミを探し始めたところだろう。

サトミは息をひそめ、じっと待つ。今は建物周辺を探しているはずだ。どこにもいないとなると、すぐに建物の中へ入ってくるだろう。

しばらく待ってみるが、少年はやってこない。

「……まだ探しているのかな……」

そと外の様子を見るが、少年の姿が見えない。まだ周囲を探しているのだろうか。

「……早く見つけてよ……」

思わず小声でつぶやいてしまう。ひんやりとした空気がサトミを包み、思わず身震いしてしまう。

こんなところでじっとしていたら、凍死してしまうかもしれない。いくら建物の中とはいえ、この周辺の気温は、冬には氷点下まで下がることは珍しくない。

「……寒いよお……」

ぶるぶると震えながら、じっと少年が来るのを待つ。しかし、なかなか来ない。

「……どこに行ったんだろう？」

寒さに耐え兼ね、サトミは建物の外に出ようとした。

しかしその時、入口のシャッターが突然閉まった。持ち上げようとしても、上がらない。

「え、どうして？ そんな……」

明かりが無く、周りがほとんど見えない。スマホのライトを照らしてみるが、機械と資材ばかりで出口らしい場所も見当たらない。手探りで探そうとするも、先端がとがったものや錆びた刃物もあるた

め、うかつに動けない。

「そうだ、誰か助けを……」

スマホを取りだし、誰かに電話を掛けようとする。しかし、ライトをつけっぱなしでいたせいで、いつの間にか電池の残量は0%になっていた。

「そんな……」

電話帳を開こうとするが、間もなく電源が落ちた。これで、外に連絡する手段は無い。徐々に下がっていく室温、大会の帰りであるため、持っている物は着替えの体操服とほとんど残っていない水筒のお茶くらいだ。

「誰か！ 誰か助けて！」

シャッターをドンドンと叩くが、ガンガンという音がむなしく響くだけだ。

「ねえ、誰か、私、閉じ込められちゃったの！ ねえ、誰か助けて！」

もしかしたら、見回りの人が来て気づいてくれるかもしれない。しかし、いつ来るのか、本当に来るのかもわからない。

「誰か、誰か助けて！ ねえ、誰か！」

必死に助けを求める。シャッターを叩きつづけるが、一向に助けは来ない。

疲れ果てて座り込んだ時、ふと少年の言葉が頭をよぎった。

「お姉ちゃん……何で見つめてくれなかったの？」

思わずサトミは天を仰ぐ。

「そっか……あの子も、きっとこうやって待ってたんだね。ずっと、誰かが見つめてくれるのを信じて……」

疲れがたまっていたのか、サトミは座り込んだまま目を閉じた。

「昨夜未明、市内の廃工場から、行方不明になっていた小学生くらいの男の子の遺体と、高校生と見られる少女の遺体が発見されました。発見当時、工場内は冷え込んでおり、二人は工場内に閉じ込められたまま凍死したものと思われます。警察は事故と事件の両方で捜査しており……」

——みんなでかくれんぼしていたのに、見つけてもらえなかった僕の気持ち、わかった？

(終)

## 饗食

アザと一

姉の住むアパートは駅から徒歩圏内にある。  
鉄筋四階建ての潇洒な作り……外壁にはベージュ色のタイル材を貼りつめ、エントランスの上にはエンジ色のとんがり屋根を乗せて、一見すれば小さなマンションといった風情である。  
入り口はきちんとオートロックで、これは姉の一人暮らしを快く思わない父が付けた絶対的な条件でもあった。  
このオートロックのパスワードを、父は知らされていない。  
私は姉からこの番号を教えられている。だから、ピカピカに磨き上げられたガラス張りの扉は、いくつかのボタンを押すだけで容易く開いた。エレベーターに乗って三階に上がれば角部屋が姉の部屋である。  
「お父さんったら……自分でくればいいのに」  
エレベーターの中でひとりごちるが、オートロックの開錠すら許されぬ父を姉が部屋へ入れるとは思えない。だからこそ、姉に可愛がられている私を使いによこしたのだ。  
私は父から、姉を彼氏と別れさせるよう言いつけてきた。  
姉は学生時代のあだ名が『オカメインコ』だった私とは違い、女優かと思うほどに美人だ。しっかり者で頭もよく、学年でトップを取るほどの成績だったのに、将来を見据えた上で大学ではなく調理関係の専門学校へと進んだ。  
その後は料理関係の職につき、いかにも高そうなこのアパートに部屋を借りての一人暮らし……大学までいっておきながら就職に失敗して、いまだ親元を離れられぬ私とは大違いだ。  
だからこそ父は、姉のことを必要以上に心配するのだろう。これまでの傷ひとつない順風満帆な人生に傷のひとつもつかぬように。  
姉から彼氏ができたと聞いたとき、父はひどく渋い顔をした。一人暮らしを始めて間もなくのことだったのだから、父の気持ちもわからぬことはない。  
しかし父は気持ちだけでおさまることなく、興信所に頼んで相手の男の素性を調べ上げたのである。  
男は妻子ある身だった。だから姉を諫めるようにと、私が使いに出された。  
少し沈んだ気持ちでエレベーターを降りると、廊下にはスパイシーな香りをたっぷりと含んだ湯気がこぼれだしていた。泣き出しそうだったほどの鬱気を払う勇ましいターメリックの匂い。  
「カレーね」  
姉は遊びに来る私のために凝った料理を作ってくれることが多い。だから、姉が私のためにカレーを煮てくれたのだと、すぐにわかった。  
「ん～、いい匂い……」  
思わずこぼれそうになる言葉と笑顔を飲み込んで換面を作る。私が今日きたのは食事を楽しむためではない。  
心して呼び鈴を押す。  
「は～い」  
ドアを開けた姉の声は底抜けに明るくて、その無邪気さに少しだけ腹がたった。  
姉の方は私の心中など知る由もないのだろう、ただいつもとおりに優しげな頬をふっくらと緩めて微笑む。  
「いらっしゃい、カレーができてるわよ」  
「お姉ちゃん、今日はごはんを食べにきたんじゃないわね……」  
「話なら食事しながら聞いわ。ほら、手を洗ってらっしゃい」  
仕方なく、いわれたとおりに卓につく。すでに食事の用意の整えられた食卓に。  
素っ気ないほどシンプルな小さいテーブルの上には、カレーをよそった皿が向かい合わせに並べられていた。その手前にピカピカに磨かれた銀のスプーンがきちんと置かれていて、テーブルの

真ん中には一輪挿しが置いてある。

私をもてなそうという姉の心尽しだろうか、ここに赤い薔薇が一輪だけ挿してあるのだが、あまりに赤すぎて血を吸い上げたかのように毒々しい花びらの重たさは、食卓の清潔さに対して不釣り合いにも思えた。

「さあ、食べてちょうだい。今日はスペインから調合した本格派なのよ」

姉は私にスプーンを押し付けたけれど、これをすぐにカレーの皿につっこむ気にはなれない。

「ねえ、お姉ちゃん、今日はね……」

「大丈夫よ、どうせ何を言われるのか予想はついてるから。お父さんに言われてきたんでしょ？」

「知ってるの？ お父さんから何か言われた？」

「まだ何も言われていないけれど、彼の周りであまりにもおかしいことが続いたからね、気がついちゃったのよ」

「おかしいこと？」

「彼の家族関係や過去を聞いて回る怪しい人が居てね、あれ、お父さんが雇った探偵さんでしょ」

「よにもよって……よほど下手くそな興信所にあたったものだ。もしかしたら父が値切りすぎたのかもしれない」

脇の下を冷たい汗が伝うような気がする。

「お姉ちゃん、おこってる？」

「どうかしらね、そのカレーを食べてくれたら答えてあげちゃおうかしら」

姉の笑顔はいつもと変わることなく優しい。だからこそ、心の内が見えない。

「ほら、早く食べてみて」

仕方なく白い丸皿に盛られたごはんの一端を掻き崩し、黄褐色のソースと混ぜ合わせて口へ運んだ。

最初にふわりと広がるのは甘いカルダモンの香り、しかしすぐに香辛料の香りが洪水のように押し寄せてこれを飲み込み、全ての香りは舌の上で渾然一体となって喉へと流れ込んでゆく。最後まで口に残ったのは心地よい辛味。

「おいしい！」

ふた匙目をすくい上げる私の手元を見て、姉はますます目尻を下げた。

「おいしいでしょう？ ちょっと変わったお肉が手に入ったから、それに合わせて調合してみたのよ」

「お姉ちゃん、凝り性だもんね」

「いいからお肉、早く食べてみて」

次の一口を勧める姉の声はあまりに邪心なくて、彼女が子供だった頃のくだらないワガママを再現されているような気分になる。

くだんの肉はゴロゴロと大きめに切られた野菜の間、ネットリと絡むウコン色のソースをまとめて転がっていた。ふと、飾られた花の赤が視界の端にちらついて、ひどく不安をかき立てられる。

「これ、なんのお肉？」

「いいから、冷めないうちに食べて」

スプーンを持つ私の手元に、姉の鋭い視線が刺さる。まるで油断なく獲物を狙う獣のように大きく顎を引いた上目遣いで、口元だけは優しい笑顔の形で。

「ほら、早く召し上がれ」

歌うような節回しが怖くて、私は匙を置いた。

「どうしたの？」

「お姉ちゃん、先にお父さんに言われた話をしようよ」

「いやよ」

「でも、この話が終わらないと、私は家にも帰れないよ」

「じゃあ、帰らなければいいじゃない」

「そういうわけには……」

姉は目元を緩め、ふわりと笑った。その表情がどれほど優しくても、騙されるわけにはいかない。思えば姉は子供の頃から柔和な表情を装うのが上手で、どれほどの怒りを腹にためていようと曇

り一つないほど完全なる朗らかな笑みを浮かべることができた。

だからこそ私は、姉を慕ってもいるが恐れてもいる。

「ねえ、お姉ちゃん……」

話し出そうとした私の言葉をさえぎって、姉がひどく明るい声を出す。

「言わなくていいから。何を言われるのかなんて、よく分かってるし」

「わかってて奥さんの居る人と付き合っているの？」

「最初は何、奥さんが居るなんて知らなかったのよ。だからそのことを知ったとき、すごく悩んだわ、一度は別れようとしたのよ。でも、だめね、本当に運命の相手とは別れられないものなのよ」

「そんなのおかしいよ、その男の人は、運命の人であるお姉ちゃんをずっと愛人にしておくつもりなの？」

「ふふふふふ、そんなことはないわよ。彼は私を選んでくれたもの」

「選んでくれたっていうことは、その人と結婚するの？」

「あら、私たちはそういう世俗の愛の形には興味ないのよ」

「なにそれ、選んでくれたのに、結婚はしないの？」

「いいから、とりあえずこのお肉、食べてみてよ」

姉は自分の皿からひとさじをすくって私の鼻先に突きつける。こうなってはもう、逃げようがない。

「食べたなら、ちゃんと話をしてくれる？」

「いいわよ、いい子で、ちゃんと食べてくれたならば、ね」

大きく開けた私の口は、どろりと熱く溶んだカレーのソースと、その中に沈んだ大きな肉の塊によってふさがれた。

「どう？ おいしいでしょ」

「うん、おいしいけど、クセの強いお肉だね」

「だから匂い消しのためにカルダモンを多く配合してるのよ」

「うん、確かにこのカレーにはぴったりな味かも」

実際、その肉は独特の臭みがある。いのしし肉の獣臭さとも、羊肉の乳臭さとも違う、日向に置いた枯れ草に似た匂い。

だからこそ絶対に調合されたスパイスの中でも個性を失うことなく、己の存在を主張する力強い肉だ。

「これ、何のお肉？」

「さあてね。それで、彼のことを聞きたいんだっけ？」

「そうそう、今日はその話に来たんだから！」

いきまわ私の口にもうひとさじをつっこんで、姉は妖しい笑みを浮かべた。

「その前にね、これだけはわかって欲しいの。お父さんが彼を快く思っていないことは知っているし、そのお父さんから言い付かってきたあなたが彼をどんな風に悪く言うのか、おおよその想像はつくわ。でもね、彼は私にとってはとっても大事な人だから、悪く言われすぎたら、お姉ちゃん、悲しいの」

「わかった、あんまり悪く言わないように気をつける」

「ありがとう。じゃあ、そのカレーを食べながら話しましょう」

私は素直にスプーンをとる。これ以上姉に逆らうのは得策ではないだろうから。

「さて、どこから話しましょうかね」

にっこりと笑う姉に向けて、まずは最初の質問を。

「その男の人はどんな人なの？」

「そうねえ、ヤギみみたいな人だったわ」

「ヤギみみたいな？」

「そう、とっても自由で、ちょっと目を離すとあっちの花、こっちの花とつまみ食いするような悪い子だったの。だから、私はいつもヤギ飼みたい気分だったわ」

「その人はどこに住んでいるの？」

姉がリビングの端をちょいと指差す。そこにはきちんとした彼女にしては珍しく取り込んだ洗濯物



が何枚か置いてあったが、その中に男物の下着が見えた。

タオルや姉の下着にまぎれた青いプリント地のトランクスは、生活感をはなして生々しい。

「そ、そうか、一緒に暮らしているんだね」

不在なのは気を使ったのか、所用なのか、どちらにしてもここに下着の主は居ないというのに……濃厚な男の体臭が部屋のあちこちから立ち上るような錯覚を覚えて目をそらす。

「お、奥さんとは別れてくれたってこと？」

「さあ？」

「さあって……単なる同棲？」

「同棲なんかじゃないわ。だって彼は、自分の全てを私に捧げてくれるって言ったもの」

「よくわかんない。結婚は、するの？ しないの？」

「だから、そういう世俗的な愛は私たちには必要ないのよ」

すでに皿に残ったカレーは残り少ない。私は皿の中に視線を落とし、スプーンで皿の表面をなでるようにして残った米飯をかき集める作業に没頭する。姉の顔を見ないですむようにと、にらむような目つきで米の動きだけを見つめる。

姉は本妻に勝利した陶酔を思い出しているのだろうか、顎を上げるようにして浅ましく笑っているのだが、その表情がひどく恐ろしく思えた。

「ほら、食べ物をやたらとこねくり回さないの。さっさと食べちゃいなさい」

そう言われては仕方ない。最後の一口を頬張る。

それでも私は、空になった皿の汚れを凝視して、決して視線を上げようとはしなかった。

姉の声だけは、やたらと上機嫌で、キンキンと耳鳴りがするほど上ずっている。

「ねえ、ごちそうさまは？」

「ごちそうさまでした」

「はい、お粗末さま。どうだった、そのヤギの味は」

「ヤギ？」

「そうよ。私が手塩にかけて育てた、愛しい愛しいヤギ……」

不吉な予感に顔を上げれば、姉はいつもと変わらず……いや、いつもより穏やかな顔で笑っている。

私は、自分の中に湧き上がるあまりに不吉な考えを否定したくて、口の端を無理やりに持ち上げて笑顔のように装う。

「お姉ちゃんの彼氏さん、いつ戻ってくるの？ 今日はお仕事なのかな？」

それに返されたのは相変わらず優しげな笑顔と穏やかな声。

「何言ってるの、彼ならほら、ちゃんと鍋の中にいるじゃない」

姉が指差すキッチンには、足元にトロ火を蓄えた大きな寸胴鍋が一つ、コトコトと楽しそうに鳴っていた。

「まさか……」

「鍋だけじゃないわ、冷蔵庫にもぎっしりよ。うん、それだけじゃない、彼は私の体の中、細胞のすみずみまで行き渡っていて、いまや私たちは本当の意味で一つなのよ」

胃のあたりを蹴り上げて、吐き気がこみ上げてきた。

「なぜ……なぜ、これを私に食べさせたの？」

「だって、私の大切な彼のことをわかってほしかったから……これからずっと一緒にいる人なんだから、家族には彼がどんな人なのかを分かってもらわなくちゃね」

姉の顔からは未だ笑顔が消えない。自分のしたことが純粋で正しさに満ちているのだと信じて疑わない、子供のような笑顔だ。

「ね、彼のこと、どう思う？ 美味しいと思わない？」

その言葉を聞き終わる前に、胃から逆流したカレーの辛味が舌の奥を刺激した。

「ぐ……」

私は口を押さえて椅子を蹴り倒すように立ち上がる。洗面所に向かって走る。

そんな私の背後から、姉が誰かと会話する声が追ってくるのだった。

「心配しないで、あなた、あの子があなたの良さをわかってくれるまで、この家から出したりしないから……逃がさないから……ね」

鍋の中でじっくりと煮込まれた『彼』にそれを語る姉は、きっと笑顔だろう。愛の恍惚に目元を細めて、優しく目尻を下げて、誰にも見せたことがないほど優しい笑顔に違いない。

それを思い浮かべるだけで、私の膝はガクガクと崩れ落ちそうなほどに震えるのだった。

END

書籍データ  
発刊 夕霧文庫  
2016年9月

編集 マーベラス=雷太  
表紙 FUMITOSHI  
協力 スタジオ瓢